
ギミック世界のワンダラー

トルサージ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギミック世界のワンドラー

【Zコード】

Z3153Y

【作者名】

トルサーチ

【あらすじ】

ひたすら小説を書き続ける男が繰り広げる、果てない妄想と恋愛模様とは？

妄想や幻覚、擬人化生物が織り成すコミカルメタフィクション+恋愛小説。【全38話】

第1話 創作男と菸草

巷では三連休らしいが、俺はベッドに入つてうた寝を繰り返しながらぼんやりと一日を過ごした。

もぞもぞと起きだして煙草に火をつけ、窓の外を眺める。白い煙の向こうに雨の雲が流線型の跡を残し窓をつたう。

三次選考で落選した小説の、編集部からの書評がゴミ箱の中に捨てられていた。

ストーリー	：	B+
キャラクター	：	B+
設定	：	B
オリジナリティ	：	B+
文章力	：	A
総合	：	B+

評価はA、B+、B、B-、Cの5段階。三次選考ともなれば、総合判定でAに達しなければ落選となる。

判で押したように毎回似たような書評が送られてくるが、賞には一度も辿り着いたことがない。「あと一息」を延々と繰り返して、早や数年が経つていた。

煙草の煙とともに大きな溜息が口から漏れる。

窓を叩く雨の音だけが、湿つた部屋の中に響く。一日中、同じ雨が降つていた。

「元気ないですね～？」

背後からの間延びした声に振り返ると、りもんが相変わらず人懐っこいそうな笑顔を浮かべて立つていた。

「マキさん、大丈夫ですか？」

「…ああ。梅雨時は気が滅入る」

「本当?」

ちょっと意地悪そうにさづらつと、りもんは「三箱から書評を拾い上げる。

「実はこれが原因ですね~」

「田代とい奴だな」

りもんは仰々しく咳払いをして、選評シートを読み上げる。

「『多くを語らずに主人公の心情を読み手に考えさせる文章力と描写力は高い。だがストーリーの展開とカタルシスに欠ける。捻りの効いた次回作に期待』、だそうですよ~」

「もう聞き飽きた」

苛立たしげに煙草を揉み消すと、ひとすじの縄のような細い煙が灰皿から微かに立ちのぼる。

「…『カタルシス』って、何ですか?」

「さあな」

不貞腐れて再びベッドに潜り込む。辛辣とも贅辞ともいえない微妙な書評が俺にもたらしたのは、精神の浄化ではなく漠然としたストレスだけだった。

*

「こんなのお気にせずう~ 元気出あして~」

りもんは書評を再びゴミ箱に投げ捨て、緑色のニースカートをひらひらと靡かせ歌い始めた。

緑色の髪の毛に緑色の大きな瞳。秋葉原が似合いそうな緑色の「スプレ衣装には、ご丁寧に緑色の触角まで生えている。

『りもん』は、俺の飼っているマリモだ。

マリモが何故擬人化して目の前に居るのか?

それは酷い妄想癖のある俺にとって、もして問題ではない。

元々は知り合いから北海道土産で貰つたもので、もう一年以上世話をしている。

マリモというのは文字通り『毬藻』なので、時々小さな水槽から取り出して手の平で丸めてあげなければいけない。そうすると、なんとなく元気になつたように見える。

俺はいつしかこの緑色でふわふわした小さなマリモに、『りもん』と名前を付けていた。

もし俺以外の世界の全ての人がエキストラだつたとしたら、毬藻の一人や二人が擬人化して目の前に現れても何ら不思議じやないだろう?

むしろそつ考えた方が、少しばかり安らぐといつものだ。

「くじけず前向う いて」 七転八倒お~

「それ違うぞ」

「陽気にして笑つてえ~」

大きな眼を瞬かせくるくると回りながら踊るりもんを見て、苦笑いする。

会社が休みの日には、一人暮らしのアパートに籠つてひたすら小説を書いている。

一日中脳内でのプロット作成と、パソコンに向かつての執筆。時には布団に入つてもキーボードを叩き続けている。高校の時からずっとそんなことばかり繰り返してきた。

そんな人間が陽気な筈が無からう。

子供の頃は『空想癖』で済んでいたものが、年齢を重ねていく度に『妄想狂』に変わつていつた。気付くと残されたのは、吸殻で溢れ返つた灰皿とフォルダに格納された300を超えるオリジナル小

説、そして毎回『次回作に期待』といつ編集部からの書評だけだった。

*

俺の名前は、牧本束。『束』と書いて『たばね』と読む。何故親がこんな名前を付けたのか、未だに分からぬ。友達も居なくて自分の行く末すら見えない俺に、いつたい何を束ねるというのだろう？

相変わらず暢気に唄い続けるりもんの頭をそつと撫でてやると、りもんは子猫のように田を細めて『にゃにゃ～』と照れた。バタバタと窓を叩く雨に振り返り、灰色の窓の外を眺める。

目覚める度に思つことがある。

グレゴール・ザムザは巨大な毒虫に変身していたが、果たして俺は何に変身しているのだろう、と。

第2話 突然、炎の1じとく

通勤中に『箱男』を読んでいると、電車の中で突然カバンを頭からかぶりたくなる衝動にかられる。

それだけで、世界の全てが変わる気がした。

昔この小説をモチーフに『箱女』という小説を書いたことがある。内容はより現代的に、高校生の彼女が突然ダンボールの箱をかぶつて現れるという短編作品だった。

その小説は、未だに俺のパソコンの片隅に埋もれている。おそらく日の目を見るとはないだろう。

小説の投稿サイトに公開したものや公募小説に応募したのは、ほんの十数作品。他の殆どの小説はデスクトップのデータフォルダの中に埋もれている。

中には書いたことすら全く記憶に無い作品もある。

幾千の文字の中で踊り、無限の妄想の中で俺は自分を失っていく。実際に箱をかぶつていないだけで、隔絶した閉塞感は何処に居ても同じなのかもしれない。

ふと外を振り返ると、地下鉄の窓に映る通路灯が瞬間的に闇の中に流されていった。

*

常に小説の妄想に囚われ続ける俺が、会社に行つてもまともに仕事をこなせる筈が無い。

出社してデスクに着くより前に、早速上司に呼び止められる。嫌

味と溜息混じりの上司の小言は、始業開始のチャイムまで続いた。

しぶしぶ席に戻る俺を見て、隣の席の東川咲奈が椅子を近づけてくる。

「昨日の報告書ですか？」

「…文章量が多すぎたらしい」

やり直しを命じられた報告書の束を、団扇のよひで扇ぐ。

「マキさんの報告書って、小説みたいですよね」

「文章書き始めるとい、止まらなくなるんだよ」

「報告書でも？」

「やつぱりマズかったな」

ネクタイを緩めながら苦笑いする俺は、さぞかし卑屈に映るだろう。

「…わざとですね？」

上司から見えないよう東川咲奈は隠れて小さな笑顔を見せる。栗鼠のように大きな瞳が、眼鏡の奥から覗きこむ。

「知つてたのか？」

「マキさんつて、分かつてやるんですから」

「……」

「ゴーヒー、入れてきますね」

口の端を上げてそう言つと、東川咲奈は席を立つ。俺のデスクの上に、こいつの間にか琥珀色をした飴がひとつ置いてあつた。

実は上司の望むような要旨を簡潔明瞭にまとめた報告書も、もつ既にデスクトップの片隅に作つてある。小説と同じく報告書でも様々なバリエーションを作つてみただけだ。

「まいったな……」

小さく呟き、その飴を口の中に放り込んだ。

ちなみに俺は知り合いから『マキ』と呼ばれている。でもこの職場で俺をそう呼ぶのは、2年後輩の東川咲奈しか居ない。社内引きこもりを実践している俺に、何故彼女だけが話しかけてくるのか？

この時の俺には、知る由もなかつた。

*

昼休みに携帯電話を開いていると、突然背後から東川咲奈が話しかけてきた。

「あれ？マキさんもメールなんてやるんですか？」

画面を見つめたまま、冷ややかな声で返す。

「俺だつて友達くらい居る…稀少だけど」

「冗談ですよ～」

くすりと笑つて、彼女は後ろから携帯電話のディスプレイを覗き込む。シンプルな七分袖のブラウスから細い腕が伸びてきて、俺の携帯電話のフレームをそつと押さえる。

「誰からですか？んん、神楽さんですね！」

「お、思い切りプライバシー侵害されてるんだが」

微かに柑橘系の香水の匂いがして、思わず振り返るのを躊躇してしまう。そんな俺の一瞬の戸惑いなど全く意に返さず、東川咲奈は相変わらず無邪気に話しかけてくる。

「あはは～。で、神楽さん何の用ですか？」

俺は携帯電話をポケットに入れると、極力動揺を隠すように立ち上がつた。

「ああ。今日の夜、神楽と辻と飲みに行くんだよ。その店の連絡」

「仲良いんですね、マキさん達の同期つて」

「そうでもない。三人だけだよ」

皮肉混じりにそう言つと、俺は喫煙室に向かつ。

普段ならそれで会話も終わっていた筈なのに、何故か東川咲奈は俺の後を付いてくる。

「な、なんだ東川？ 煙草吸うようになつたのか？」

「まさか。ジューース買いに行くだけですよ」

何となくさつきの動搖を見透かされた気がして、微妙な居心地の悪さを感じつつ喫煙室に入る。

昼休みも早い時間だったので、喫煙室にはまだ誰も居なかつた。きょろきょろと辺りを見渡しながら、東川咲奈は喫煙室の自販機に向かつ。

部署の中で東川咲奈とだけは話が出来るのも、彼女が新入社員だった時に俺が研修担当だつたからだ。もしさうでなければ、まともに話す機会すら無かつただろう。

排煙機のスイッチを入れ煙草に火をつけると、立上る煙が微かにモーターの呻る排煙機に一瞬で吸い込まれていく。

吸気口を怪訝そうな表情で見つめる俺に、レモンティーのカップを持ったまま東川咲奈が話しかけてくる。

「何神妙な顔してるんですか？」

「…煙草の煙」

「煙？」

「俺、空中に拡散していく青白い煙を見るのが好きなんだけな…どうも排煙機つてのは味気ない」

「へえ…。男の人って、そういうものなんですね」

意外そうな表情を浮かべて、東川咲奈はセミロングの髪の毛先をくるくると手で弄ぶ。…それがいつもの彼女の癖。

少しの沈黙の後、先に口を開いたのは東川咲奈だった。

「マキさん、えーと…。今度、一緒に映画観に行きませんか?」
唐突な彼女の言葉に、俺はただ排煙機に吸い込まれる煙を見つめ
る…フリをするしかなかつた。

手にした煙草が、その灰の形を残したまま長く燃え延びているの
にも気付かず。

第3話 直交座標系恋愛方程式

「そや、こないだ取引先の受付の娘から辻のアドレス聞かれたぞ」「ええ？もしかして教えちゃったの？神楽君…？」

「そらもちろん、教えた」
箸を咥えたまま、神楽輝延は座敷の柱に寄りかかりわざと品なく笑う。

行きつけの居酒屋で、俺達はいつもの座敷席に座り飲んでいた。

「勝手に僕の個人情報を…！」

「ええやんか。辻だつてまんざらでもないやろ」

「まあ、そりやそうだけど…」

さつきから対面で神楽にからかわれているのが、辻健市。
関西人丸出しの神楽と、お坊ちゃん気質の辻の掛け合いは見ていいだけで愉しい。

冷えたグラスのビールを喉の奥に流し込み、斜に咥えた煙草に火をつける。

それぞれ社外に出向している為に最近はこうして顔を合わせる機会も少なくなつたけれど、同期で入社した時から俺達三人は何となく波長が合つた。

「辻みたいな草食系が、もて離される時代なんだな」「マキ君まで…」

頬を膨らませる小柄な辻の姿は、そつちの気は無くても可愛らしく見える。

「褒めてんだよ。受付嬢に見初められるなんて光榮じゃないか？」「ほ、僕は派手な人は好きじゃないのだ…」

照れる辻のせらせらの髪の毛を、神楽がくしゃくしゃに搔き亂る。

「何言つてんねん！これから合コンの段取り決めるんやからな！」

「やつぱりそれが目的じゃないか～！」

俗っぽいやり取りも、不思議と気にならない。軽薄感を洒落として愉しむことのできる一人だからかもしれない。

実際の仕事上では、社内の評価も高くプロジェクトのサブリーダーに抜擢されている辻や神楽と、俺の差はますます拡がっていくばかりだった。

*

飲み始めて数時間が過ぎて酔いがまわり始めた頃、神楽が突然口を開く。

「お前等さ、江間口女史ってどない思つ？」

「…え？ どう思つて」

「……ねえ、なのだ」

唐突な質問に、俺と辻は互いに顔を見合わせ首を傾げる。

江間口女史といつのは、俺達より5歳ほど年上の会社の先輩だ。その気の強さと仕事のキャリアで、社内でも一目置かれている幹部候補でもある。颯爽とした容姿と相俟つて、冷酷な鉄面皮とも陰では噂されていた。

何本目かの煙草を箱を叩いて取り出しながら、尋ねる。

「そういえば神楽の直属の上司だよな、江間口女史つて

「そや…な」

グラスの露で塗れたコースターを手で弄ぶ神楽。珍しく歯切れが悪い。

あまり酒に強くない辻が、顔を真っ赤にしてあやふやな呪文で言

う。

「あれ～？ 神楽君、ま、まさか～！なのだ」

「……」

騒がしい居酒屋の中で、俺達の座敷だけが奇妙な沈黙に包まれる。神楽は大きくひとつ息をついた後、意を決したように呟つ。

「俺な…江間口女史に告白しようと思てんねん」

*

煙草の灰をステンレスの灰皿に落とし、レモン色の灯りを背景にぼんやりと揺らぐ煙を見つめて俺は言った。

「ま、江間口女史と神楽はずつと同じ職場だったしな。不思議じゃないわ」

「そ、そつかマキ！？ お、俺、へ…変やないか？」

「ちつともおかしくないのだ～。ちよつと怖いけど、江間口女史は綺麗な人なのだ～」

珍しく辻が大声を出してはしゃぐ。

「……」

嬉しそうな恥ずかしいような、奇妙な照れ笑いを浮かべる神楽のグラスにビールを注ぐ。

「ツワモノだけど、神楽らしいよ。けつこう似合つかもしれないな

「お…おお。そない思うか？」

「勝算あるのだ～？」

「そんなもんは…分かるわけないやる」

そう言つと、神楽はグラスのビールを一気に飲み干す。

*

「そうだ。やる前から計算したって仕方ない。恋愛なんて、タイミ

ングと勢い。

実直型の性格から言つて、きっと神楽は明日にでも江間口女史に話をするだらう。

そして何の根拠もないけれど、神楽と江間口女史はつまくいくような気がした。

同年代の人間は皆仕事や恋愛を謳歌しているのに、家に籠つてひたすら小説なんか書いてるのは俺だけかもしない。

人間の位置が座標で示せるとしたら、結びついた相手の座標との距離が式として表せる。ならばその式を導く過程が、恋愛とも言える。

けれど今、俺の軸線上には誰の姿も見えない。

果てない妄想と文字達だけがその座標を取り囲み、俺を埋もれさせていく。

その先に、いつたいどんな式が導かれるといつのだらう。

「なんか…いいな。お前達」

「ん~何か言ったのだ?マキ君?？」

「いや、何でも。それより次、何飲む?」

不思議そうな顔をする辺にドリンクのメニューを渡して、俺はまた煙草に火をつけた。

第4話 天敵、リチウム登場

じつとつとした梅雨も終わり、次第に季節は夏に移り変わつた
していた。

りもんの水槽の水を入れ替えていると、珍しく携帯電話が鳴る。
普段はめったに電話には出ないのだが、ディスプレイに表示され
た東川咲奈の名前を見て、思わず通話ボタンを押してしまつ。電話
口から声優さんのような可愛らしい声が聞こえてきた。

「マキさんですか？」
「は」
「は」
「ふつ！ そんなにかしこまらないなくても
「俺、電話で話すのって苦手で…」
「チャットやメールじゃ軽快なのに、あはは」

この間映画に誘われて以来、東川咲奈とは頻繁にメールやツイッ
ターで連絡をとるようになつていて。内容は映画や音楽の話など他
愛ないものだつたが、明らかに彼女との距離は縮まつた気がする。

「そういえば、いつ映画観に行きます？」
「ん、近いうちに」
「またあ～」
脱力混じりの笑い声が携帯電話から聞こえてくる。適当に言葉を
濁していくも、東川咲奈はどこか愉しそうだ。
別に映画が嫌いな訳じやないし、好きな作品に関してはマニアッ
クなくらいだ。だから余計に誰かと映画に行くと困ることがある。

まばたきするのも忘れるほど、映画に見入つてしまつのだ。会話

「どうかエンドロールが流れて館内が明るくなるまで、俺はまんじりとも動かない。」

大学の頃唯一つき合つた当時の彼女に言われたことがある。

“牧本君って、私が隣に居るの忘れちゃってるよね”

「どうも俺は、『テートで映画を愉しめるタイプでは無いらしい。」

「この間、会社の近くに大きなシネコン出来たの知っていますか？」

「あ、いや…」

「じゃあ場所はメールに添付しますね。日には会社のメッセンジャード相談しましょう～」

「え、行くの決定？」

「決定です」

断定口調でそう言った後、東川咲奈は電話口で軽やかに笑う。栗鼠のように黒い瞳で微笑む、彼女の姿が眼に浮かんできた。

「はは…了解」

「絶対ですよ」

人差し指で頬を搔きながら、相槌をつつ。あの屈託無い笑顔が見れるなら、たまには興味の無い映画を観るのも悪くないのかも。

*

東川咲奈との電話を終えおもむろにパソコンの電源を入れていると、りもんが不思議そうに俺の顔を覗き込む。

「あれ～？ どことなく一矢ついてませんか～？」

「元々こういう顔だ」

「赤くなっていますよ～」

りもんが俺の頬をぷにぷにと指でつつく。その指に齧りつく真似をすると、きやつきやと陽気なりもんは笑う。

「でも、久しぶりじゃないですか～？」

「何が？」

「女つ氣」

「ほつとけ」

どことなく氣恥ずかしさもあり、俺は素つ氣無い風を装つてパソコンの前に座る。

【銀色塔】というハンドルネームで、俺は幾つかのサイトに小説を公開していた。

大抵のサイトは投稿作品に読者が自由に意見や感想を書き込めるようになつてゐる。自分の小説に対する評価を辿つていくと、やらうと辛辣な一件のコメントを見つけた。

『語彙の貧弱さもあり、細かい描写が雑。主人公の心情も掘み難く、物語として盛り上がりに欠ける』

「うわあ、随分と手厳しい意見ですね~」

後ろからディスプレイを覗き込みながら、りもんが言つ。

「……むう

「書き込んでるの、誰ですか~?」

「こんな評価するのは、リチウムしか居ない

「リチウム?」

パソコンデスクに頬杖をついて、苦笑いする。

ハンドルネーム【リチウム】は、昔からのウェブ上の知り合いだった。

【リチウム】を知つたのは、確かどこかの創作系コロニーティサイト。もう3年ほど前の話だ。

散文詩のような掌編を、毎日投稿してくる人物がいた。投稿量もさるものながら、それ以上にその硬質で殺伐とした作品の雰囲気に圧倒された。

叙情感はあるのだがどこか覚めた視線で物語が描かれている。実

際どの小説を見ても、俺よりもはるかに書き慣れていた。

ハンドルネーム【リチウム】というのも、やけに無機質で皮肉な名前だった。

殆ど誰とも交流しないその作家に興味を惹かれ、作品に対するメントを何度も書き込んでいたが、ようやく返事が来た。

『【銀色塔】、良い名前だね』

その余りにぶつきらぼつた物言ひに、返す言葉を失つた。他の参加者との数少ないやりとりから、【リチウム】が女性であることを知つて更に驚かされた。

女性らしさの微塵も感じられないと乾いた作品を読む度に、突き放されたような距離感を抱く。そしてその距離感はあえてリチウムが意識して書いているものだと、俺は数ヶ月も経つてから気が付く。

一風変わったそのウェブ作家と知り合つて、互いのメールアドレスを教えるまでに一年もの時間がかかった。とは言つても、メールの内容は大抵が互いの小説の感想なのだが。

その頃から、リチウムの批評の手厳しさは変わっていない。といふか、俺の作品が褒められたことは殆ど無かった。

でも、何故かそれを不快には感じなかつた。彼女の文章にそう思わせる説得力があるからなのか、単に俺が気圧されているだけなのか?

それは未だに自分でも分からぬ。

*

「マキさん、負けちやだめですー！何か言い返さないと…」
りもんが俺の背中を両手で叩く。

「とは言つてもなあ……」

バツが悪そうに頭を搔く俺を見て、りもんが頬を膨らませる。

「はあ～。創作男も女性には弱いんですね～」

「まあまあ、そう言つな

りもんの頭を撫でながら、もつ片方の手で煙草に火をつける。

実は何度かメールのやり取りをしてるうちに、リチウムが実は俺と同い歳で、しかも同じ電車の路線に住んでいることが分かった。近くで遠い存在だと思ってたネット上の知り合いで、実際にすぐ近くでやりとりしている。

もちろん会つたこともないし、それを互いに言い出すことも無かつた。でも、もし、万が一…。

「…はは、ありえん」

煙草の紫煙を吐き出しながら、奇妙な妄想を頭から振り払つた。

第5話 銀髪のシェリル

現実は映画のよつて毎日いろいろなイベントがあるわけじゃない。何も変わらない一日だってある。いや実際、一年の殆どがそんな日の繰り返しだろう。

夜通しパソコンに向かつて小説を書き続け、気付くとすっかり陽が昇っていた。

創作の思念が靄となつて、部屋の中で煙草の煙とともに立ち込め
る。ここまで閉塞感が充満してしまうと、さすがに息苦しい。

ジャケットのポケットによれよれになつた文庫本を入れて、俺は
部屋を出た。

夏の訪れを感じさせる陽光を背に受けて、郊外に向かいシェリル
を走らせる。

『シェリル』というのは俺の愛用の自転車である。もちろん流行
のロードサイクルなどではなく、『ママチャリ』と呼ばれるきわめ
て普通の自転車だ。

「ええ感じやな~」

「めいっぱいタイヤに空気入れてきたからな

「でも前ブレーキの効きが悪いわ。錆びてんぢやう~」

「そろそろ油、注さないとな

銀色の髪を靡かせたシェリルが、さらにスピードを上げる。

もちろんシェリルも、りもんと同じ擬人化した人物だ。名前の由
来は、サイクリングをしている時に何となく口ずさんだ『Ever
yday is a Windy Road』からきてる。

「今日はどこに行くのん？」

「郊外の森林公園なんてどうだ？」

サドルから腰を浮かしペダルに立ちあがると、照りつける陽射しの中、爽やかな風が頬を撫でる。

「ええなあ、天気良いし。めっちゃ気持ちいいわ～」

薄いブルーの瞳を輝かせ、シェリルは振り返り微笑む。

じめじめとした梅雨から夏に変わる季節。ハンドルを左右に振つて立ちこぎしながら見渡す世界は、いつもと少し違つて見えた。

ポケットに押し込んだ文庫本と煙草と缶コーヒー。それだけあればいい。

のんびりと芝生にでも寝転がつて、歯車のように廻り続ける時間を止めるのもたまには悪くないだろ？

「着いたら膝枕したるさかい」

「ママチャリの膝枕か…」

「細かいことは言いつこなしや

やたら大きな声で笑うシェリルにつられて、頬が緩む。

森林公園に近づくにつれ、人や車の往来も少なくなつていく。勾配の激しい坂道を登りきると、公園の入口の遊歩道まではなだらかな下り坂だった。

高揚してきた気分に、自然とペダルを漕ぐ速度が上がる。

「もうちょいやわ。マキ、もっと飛ばさな～！」

「応！」

さらに前傾姿勢になりペダルを勢いよく踏み込んだ瞬間、歩道脇の茂みから突然何か小さい物体が飛びだしてきた。

「お、わっ！？」

瞬間に視界の隅に映つたその緑色の物体を避け、咄嗟に俺はハンドルを切つた。

コンクリートのざらついた感触。目を開けると、逆さになつた世界が見える。

チカチカと射し込む陽の光だけが、ぼんやりと俺を照らしていた。

意識を取り戻すにつれ、次第に鈍い痛みが全身を覆い始める。

「いて…」

俺の体は完全に歩道に投げ出されてしまつたようだ。

かるうじて体を起こすと、シャツの右腕が破れておりし金で擦つたような肘の傷から血が滲んでいた。

よくあるジャックナイフターンを失敗した映像そのままに、どうやら俺は自転車から完全に宙に投げ出されたらしい。ロックしたブレーキが呻る金属音が、まだ耳の奥に残つていた。

「まいつた…」

自転車でこれほど激しくコケたのは、小学生以来だ。

見渡すと、シェリルもそのまま歩道の柵に突つ込んで倒れていた。

「だ、大丈夫か！？シェリル！」

強かに打ちつけた膝にも力が入らなかつたが、何とか足を引きずりながらシェリルに駆け寄る。

「何か、じつつい痛いんやけど」

茫然とするシェリルの腕が、曲がるはずの無い方向に曲がついた。

「お、おわっ！シェリルっ！腕っ！腕っ！」

「…な、何やのこれっ！？」

自分の腕を見て、シェリルの顔からみるみる血の気が失せていく。

そのハンドルは、完全にぐにやりと90度に折れ曲がつていた。

自分の痛みも忘れ、俺は口を開きにしたまま言う。

「…」レは、重症だ

「ひいいん、どないしょ？～？マキ～」

腕をとんでもない方向に向けたまま、シェリルが慌てて抱きついてきた。

「腕が、腕がこなになつちやつた…」

ぱろぱろと頬をつたうシェリルの涙を、指で拭う。

「だ、大丈夫だ。今から自転車屋行つて修理しよう。腕くらいすべり替えられる

「ほんま？」

「ああ。今は痛いだるうナビ、ちよつとだけ我慢してくれ

「…でも、自転車屋さんどこあるか分からんし、足も痛くて動かへん

シェリルの足元を調べてみると、チーンも切れていた。

「これは…ひどいな」

眉をひそめる俺を見て、シェリルが俯いて心配そうに囁く。

「ウチは安物のチャリやけビ…、でもな…捨てられるんは嫌や」

普段の陽気さとは全く違う、気弱な表情を見せるシェリルに一瞬

どきりとさせられる。

シェリルの頭をそつと撫で、その体をゆつくりと抱き起こす。

「何言つてんだ、もう5年も乗つてんだぞ。捨てられるもんか

「置いてかへん？」

「絶対一緒に連れて帰る」

「…マキ～」

あらひに号泣して抱きついてくるシェリルを宥めながら、ふと気になつて転倒した場所を振り返る。

道路脇の茂みから飛び出してきた小さな物体が、まだ道の真ん中に居た。

それは……、一匹の小さなカマキリだった。

カマキリは一本の鎌を構えて立ち上がった姿勢のまま、逆三角形をした複眼で俺達をきょとんと見つめていた。

「カマキリ……？」

小さく咳くと、カマキリは羽根をパタパタと何度もかせた後、何事も無かつたかのように茂みの中に引き返していった。

苦笑いしながら頭を搔く俺を見て、シェリルが言う。

「ほなら、マキはあるのカマキリを避けようとして？」

「突然だつたから、思わずハンドル切つちまつた……悪い」

がつくりとうな垂れる俺に、シェリルは折れ曲がった腕を絡ませる。

「轢かんでも良かつたやん。そういうマキの優しさといひ、ウチ好きやで」

「……応」

「命は大切にせなな」

互いの体を支えあうように、シェリルと俺は元来た道を戻り始める。

初夏の陽が、緑色の葉の茂る木漏れ日の合間から射し込んでいた。

ショリルを修理してアパートの部屋に戻る頃には、辺りはすっかり暗くなっていた。

「つづ、せつ、かくの休日に…酷い目にあつた」

「まあまあ、ええやんか」

ピカピカの新しい腕と足回りを手に入れたショリルが、ご機嫌で部屋の中を飛び跳ねる。

「…結局、ひどい出費だ」

「自転車ならもう一台、買えたんじやないですか？」

俺の右腕に消毒薬を塗りながら、マリモのりもんが苦笑いして言う。

「あはは、何言つてんの～！ウチは一人しかおらへんやろ？なあ、マキイ」

ぴょんとベッドの上に飛び乗ったショリルが、しなだれかかってくる。透き通るようなターコイズブルーの瞳が、俺の顔を覗き込む。

不思議な気分だった。

この部屋の中には、本当は俺一人しか居ない筈なのに。

ぐだぐだと文句を言いながらも、俺はいつまでも執着したものにこだわり続ける。

創作活動にしたつて、そうだ。

小説を書き続ける作業を延々と何年も続けていくことに、何の意味があるのだろう？既にそれは「書くのが好きだから」という範疇ではなかつたし、特に対外的評価に拘る訳でもなかつた。ただ、書き続ける先に何かが見つかるような気がした。

それだけの話だ。

「やっぱり損な性格ですね～、マキさんって」

「破れたシャツの裾を摘み、りもんが俺の腕に包帯を巻き始める。

「もつて生まれた宿命やな。”さが”つてやつ？」

考えを読み取れるのか、シェリルは眼を細めて笑う。

疲労困憊で何の余力も残っていない俺は、力なく口の端を上げて笑しかなかつた。

*

その時、唐突に玄関のチャイムが鳴つた。

「…誰だよ？こんな時間に」

痛む膝を抑え、のそのそと立ち上がる。

この部屋を借りて3年になるが、新聞の勧誘や訪問セールス以外に誰も来たことがない。

「は…い？」

頭を搔きながら面倒くさそうにドアを開けると…、そこには、紫色の髪の毛を頭の左右で束ねた女の子が立つていた。その吊り眼氣味の瞳に見覚えがあつたが、どこで会つたのか思い出せない。

「あの…どちらまで？」

いぶかしげに眉をひそめる俺の顔をまじまじと見て、その若い娘はようやく口を開いた。

「恩返しに来たぞえ」

「へ…？ 恩返し？」

言葉の意味が分からず玄関先で首を傾げていると、娘は突然刃渡り30センチはあろうかという大型の鎌を俺の方に向けた。

「おわっ！」

娘の手に握られた銀色に輝く草刈り鎌を見て、思わず一步後ずさる。

その様子を俺の背後から見ていたシェリルが、俺の焦燥など全く無視した暢気な声で言った。

「あんた、さつきのカマキリやない?」

「…え?」

啞然としながらシェリルと鎌を持った娘を交互に見渡す俺を尻目に、娘は表情を崩すことなく飄々と答える。

「そうぞえ」

「力…カマキリ?」

吊り気味の赤い瞳。「ぞえ」という平安時代の公家のよつな奇妙な語尾。そして…手にした鎌。確かにそれは常人とは明らかに違う。どちらかと言えば、りもんやシェリルに近いかも知れない。

「やつぱりや~」

能天気にパチパチと手を叩き、シェリルは暢気に笑う。さすが擬人化した者同士、シェリルにはすぐ娘がカマキリの化身だと分かったようだ。

「さつきは命を救つてもらつたから、恩返しに来たぞえ」

鎌を脇差のようにベルトに収めながら、娘は相変わらず飄々とした口調で話す。

「いや、別に恩返しとかは…」

躊躇する俺の言葉を無視して、カマキリの化身はずかずかと家に上がりこむ。

「カマキリは情に厚い生き物ぞえ。恩返しするまではこの家に居るぞえ」

「とは言つてもなあ…」

首を捻る俺の腕を引っ張り、りもんが言つ。

「いいじやないですか～。人が多い方が賑やかですよ～」「いやいや、俺以外人間じやないから」シェリルも後ろから俺に抱きついて、猫のよつこ「ロロロロ」と甘えた声を出す。

「んな堅いこと言わへんでも～」

「いやしかし…これ以上この部屋に擬人化キャラが増えても…」

「名前つて何ですか～？」

「決まつてないぞえ」

「ほな力マキリの『鎌子』にしよか

「こ、こらお前ら～俺の話を…」

「ウチは自転車のシェリルで、こっちがマリモのつもん」

「宜しくぞえ」

「こちらこそ、よろしくです～」

「だ、だからお前ら～俺の話を…」

俺の意見が女性陣に聞き入れられる訳も無く、俺のアパートには3人目の擬人化キャラ『鎌子』が一緒に住む事になってしまった。

きょろきょろと部屋の中を見渡した後、鎌子は勝手にエプロンを付けて台所に向かう。

「お礼に、『飯作るぞえ』

*

さすが鎌の使い手だけあって手際の良い鎌子の手料理が、次々と運ばれてくる。しかもどれもこれも、意外なほど美味しかった。

「牧本、たくさん食べて精力付けるぞえ」

「あ、ああ。ありがとう」

何故か鎌子は俺の事を”マキ”ではなく苗字の”牧本”と呼んだ。

俺の隣で箸を咥えたまま、りもんが神妙そうに首を捻る。

「どうかしたのか？りもん」

「マキさん。そういうえばカマキリって、確か最後にメスがオスを…」

「……」

食べ切れないほどの豪華な料理を運びながら、鎌子はその赤い瞳を輝かせて言つ。

「どうした牧本？もひじどんぐん食べべるぞえ」

第7話 七夕夜想曲

ペダルを漕ぎながら空を見上げると、夜空が染まるくらいに満天の星が空を覆っていた。

珍しく晴れた今年の七夕。公募用の原稿を入れた封書をシェリルの前力コに放り込んで、俺は近くのコンビニに向かっていた。

ショッピングモールのいたる所に、短冊の吊るされた笹の葉が飾られている。色とりどりの短冊のイルミネーションを眺めていたシェリルが、銀色の髪を夜風に靡かせ訊ねる。

「願いが叶うなら、マキはどんなことを短冊に書くん？」

円周状の光の輪を瞬かせる星空を見上げながら、交差点の角を曲がる。

「そうだな……俺好みの可愛い織姫さんと会えたらなあ……」

そう呟いた瞬間、浴衣姿の人影が目の前に飛び込んできた。

「う……あっ！！」

急ブレーキをかけたが避けきれず、俺は前のめりになつたままその人影にぶつかる。

若い女の持つていたチラシが、勢いよく空中を舞う。

「「」「ごめんっ！大丈夫ですか！」

倒れたシェリルで痛打した膝を押さえながら、俺は慌てて人影に近づく。

「つてか痛いしつ！どこ見てんのよつ！」

どうやらビラ配りらしき浴衣を着た女が、腰を擦りながら怒鳴り返してきた。

(……あれ?)

その声と口調に、聞き覚えがあった。

いぶかしげに首を捻り、俺はその女の顔を覗き込んだ。

「お前…琥珀…か?」

*

眉をひそめ振り返つた若い女は、やはり森琥珀だった。

「つてか束じゃないの。あーもづ、最悪なんだけど」

俺の事を『マキ』ではなく『束』^{たばね}と呼ぶのは、親類しか居ない。田の前で浴衣の裾をはたきながら頬を膨らませているのは、森琥珀。俺のじいさんの兄弟の奥さんの姉妹の孫のじうのじうのといつ、いわば遠縁の親戚だ。

大学に入つて東京に出て来ているとは聞いていたが、まさかこんな場所で出くわすとは思つてもみなかつた。

「お前こんな所で何やつてんだよ?…しかもそんな格好して」

短い浴衣の裾から顕わになる太ももを視線を送りながら、しりもちをついてる琥珀の手を掴んで引き起こす。

「じ、じろじろ見んなよつ! 工口束つ!」

「相変わらずお前は口が悪いな。七夕に浴衣着てビラ配りかよ?」「つてかバイトなんだから、仕方ないだろ!」

散らかつたチラシを拾い集めながら、琥珀は悪態をつく。

「久々に会つたつてのに…性格全然変わつてないな、お前

「悪かつたわね」

集めたチラシを差し出すと、琥珀はそれをひつたくるように奪い取る。昔からそうだ。親戚の集まりがある度に、俺と琥珀はいつも喧嘩になる。

「お前、」の近くに住んでるのか?」「悪い?」

「なら連絡くらいこよこせつての。最近実家にも全然寄り付いてないつて聞いたぞ」「つてか、束には関係ないじゃん」

「まあ、そりだけどわ…」

俺は口ごもりながら倒れたシェリルを起こし、歪んだ前カゴを力任せに曲げ直す。

「くそ、フレームも曲がっちまつた」

「あんたがボケーっと空見て自転車漕いでるから悪い」

「七夕だつてのに最悪だな、お互い」

道端に投げ出された原稿の封筒を拾い上げ、塗装の剥げたカゴの中に放り込む。

「邪魔して悪かつたな。…バイト頑張れよ」

「……」

琥珀は何も言わず、不貞腐れたよつて後ろを向いて緋色の髪の髪留めを直していた。シェリルを押してその場を立ち去つとした時、琥珀の帯が曲がっているのに気づく。

「…つたぐ」

放つておくのも悪い気がして帯を直してやつと近づいた時、突然琥珀が振り向いた。

「つてか、ねえ! 束…」

「えつ…」

顔を上げたすぐ目の前に、琥珀の唇があつた。

一瞬だつた。

それは触れるか触れないかくらいの、ほんの僅かな接触。

甘酸っぱい柑橘系の香水の匂い。赤毛の長い髪が俺の頬をそりそ

らと撫でる。

琥珀のピンク色の口紅が、俺の唇に掠つた。

「あ……」

弾かれたように俺達は互いに身を仰け反らせる。

慌てて自分の口に手をあてると、そこには艶のある琥珀のグロスの跡が間違いなく残っていた。

「う……わっ！ってか、うわっ！！」

田玉が飛び出すくらい大きく眼を見開いた琥珀が、ぱたぱたと両手を上下に振つて大声を上げる。「な、何してんのよつ！束つ！！」

「え……いや……お、俺は帯をだな……直そつと……」

「さ、先に言いなさいよつ！」

「おお前が急に振り向くから……」

「このバカつ！」

顔を真っ赤にした琥珀は、手にしたチラシを俺の顔面に叩きつけて走り去る。街を行き交う人々のざよめきの中、駆けていく琥珀の後ろ姿を俺はただ見つめているしかなかつた。

今日は七夕の夜。瞬くミルキー・ウェイが、甘い香りを残し夜空を覆い尽くしていた。

第8話 ギミック世界のワンタナー（その一）

絵に描いたような真っ白い入道雲が鮮やかな空色に浮かび、名前も知らない鳥が羽根を広げて空中を旋回している。俺はぼんやりとそんな空を見上げていた。

「…………キ……マキ！」

誰かの呼ぶ声で我にかえり振り返ると、神楽輝延が不思議そうな顔でこっちを見つめていた。

「……神楽？」

「何ボーッとしてんねん。道、こっちやで」道を指差す神楽の隣では、辻健市が口に手をあててくくくと笑つている。

そのすぐ先に建つている校舎の時計台の針が、10時を指していた。

「早よ行かんと、江間口女史に怒られるやん」

「そつそつ。怒った時の部長の田は氷のように冷たいのだ」

校門に向かつて足早に駆け出す、神楽と辻の後姿を茫然と見つめる。

(……学校?)

肩に食い込むバッグの重みに気付く。

俺は紺色のバッグを肩に担いで、制服のズボンに手を突っ込んでいた。

白いシャツから、微かに芳香剤の匂いがした。

(……制服?)

「…え？」

一筋の汗の雫が、頬をつた。

*

「…あのさ、俺達って高校生だったっけ？」

「は？何言つてんの？暑さで頭がないかしたんか？マキ」

部室棟への階段を上がりながら、神楽は眉間に皺を寄せた。

「みんな無事に高校2年生なのだ。神楽君は危うく留年して1年生やり直すところだったけど」

「放つとけ」

笑つて話す神楽や辻の様子は、いつもと何も変わらない。

古びた校舎に、壁の漆喰の匂い。埃の溜まつた下駄箱。練習する運動部の掛け声。

見慣れた制服に、いつもの無駄話。

神楽はこの間の夏祭りの時に貰つた『祭』と書かれたウチワを扇いでいる。色白の辻がこの暑いのに長袖のシャツを着ているのは、日焼けするのが嫌いだからだ。

そして俺のバッグの中は、いつもと同じ昼飯のパンと画材道具。

普段と何も変わらない日常なのに、この違和感は…何だろう？窓から射し込む夏の陽がチカチカと白い光彩を瞬かせ、蝉の声がつるさいくらいに耳の奥でエコーしていた。

「本当に大丈夫？マキ君」

童顔の辻が、きょとんとした表情で俺の顔を覗き込む。

「あ…ああ」

早く美術部の部室に行って、冷たいジュースでも飲むのだ

「そういや今…夏休み…だよな？」

「ほんま。夏休みやつてのに部活つて。しかもなんつう暑さや。俺の質問の意味を取り違えた神楽が、ウチワを扇ぎながらシャツの前をはだける。

「夏休み終わつたら、すぐ秋の文化祭だから仕方ないのだ~」

「お、ええぞ！ 時期部長候補」

「茶化さないでほしいのだ~」

「人のやりとりも、いつもと何も変わらない。」

「なあ辻。…今日つて何やるんだつたつけ？」

「今日は部員全員で出展テーマの打ち合わせなのだ」

「ああ…確かに、そうだつたな」

苦笑いしながら、俺はばさばさと頭を搔く。

なんだろう？ 分かつているはずなのに記憶が混乱している。

俺は高校生だ。

神楽と辻は1年からのクラスメート。成績は3人そろつて良くない。

そして俺達は美術部に所属している。絵に興味も無い神楽や辻を、無理やり美術部に引き込んだのは俺だ。

学校は夏休みだが、今日は部活の活動日。だから俺達はこうして画材を持って、午前中から学校に来ているんだ。

「そう…だよな」

腕を組んで頭を捻りながら廊下を歩いていると、背後から声が聞こえてきた。

「おはよみづこまーす~」

弾かれたように慌てて振り返ると、そこに制服姿で立っていたのは……東川咲奈だった。

*

窓から射し込む陽光の照らす中、東川咲奈はいつもと同じ笑顔で両手を後ろに組んで立っていた。

水色のブラウスに白いニットベスト。大きめのリボン。チェックのミニスカート。まさに絵に描いたような制服姿だった。

「うーす」「おはようなのだ」

平然と挨拶をする神楽と辻の横で、俺だけが制服姿の東川咲奈を見て喉まで出かかった“コスプレ”の単語を飲み込みながら、ひどくぎこちない挨拶を返す。

「お…お、おは…よう！東川」

「どうしたんですか？マキ先輩」

眼鏡の奥の栗鼠のよう大きな眼を輝かせ、東川咲奈は首を傾げて俺を見る。

「え、いや…今日も暑いな！あ…ははは！」

「…先輩、何かいつもと同じ違いますか？」

「そ、そんなことないって！」

「そうですか～？」

怪訝そうな目つきで覗き込む16歳の東川咲奈の顔が、すぐ間近に迫る。

俺はあたふたしながら、あらぬことを口走ってしまう。

「そ、そういう…今度映画観に行くんだつたっけ！？一人で…」

……。

この暑さの中、一瞬で周りが凍りつくような沈黙。

神楽が扇いでいたウチワをポロリと落とす。ジージーと鳴く蝉の声だけが、さらに静寂を際立していく。

「なーなーな何言つてるんですかっ！」

その瞬間、湯気が立つほど顔を赤くした東川咲奈が俺を思い切り突き飛ばす。

「げはつ！」

何が何だか分からぬまま、俺は後頭部を柱に強打していた。

第9話 現実と小説の狭間で

ちかちかと目の前を飛び交う漫画で見たような星達と、後頭部に走る強烈な痛み。

目を開けると、俺はキーボードに突っ伏していた。

「い、痛え…」

後頭部を押さえながら顔を上げると、りもんとシェリルが俺の顔を覗き込んでいた。

「目が覚めたみたいですね」

「ほんま大丈夫かいな？」

りもん達はいつになく心配そうな表情で、俺を見つめている。

「…一体、どうなつてんだ？」

振り返ると、そこには明らかに変形したフライパンを持つ鎌子の姿があつた。

「牧本が意識を取り戻したぞえ

「お、お前…まさかそれで？」

「マキさんつてば、PCの前で氣を失つてたんですね～」

「そうやで。あんた目見開いたまま全く無反応やつたから、鎌子がちょっと小突いただけや」

「…」

頭に出来たたんこぶを擦り、コントのようにささかし良い音がしだんだらうな、などとどうでも良いことを思った。

*

見事に膨らんだ俺のたんこぶをタオルで冷やしながら、シェリル

と鎌子が話す。

「でもホント、マキってば画面見つめたままフリーズしてて焦ったわ」

「牧本は完全に瞳孔開いてたぞえ」

煙草に火をつけ、紫煙が揺らぐ部屋の中を見渡しながら記憶を整理してみる。

「りもん、俺が気を失つてたのってどのくらいの間だ?」

「うーん、30分くらいですかね~」

「確か俺、会社から帰つてきてすぐ小説書き始めたんだよな… 今日一日中会社で考えてた新作の」

「仕事せえよ、この男は」

呆れたように言つシェリルを尻目に、煙草を咥えたままパソコンの画面に映し出されたエディタを捲る。

「そうだ…これ…」

画面に現れた小説の文字列を見て、睡然とする。

思わず椅子から立ち上がつた俺の背中越しに、慌ててりもんが画面を覗き込む。

「この小説ですか~?…ん~『ギミック世界のワンドララー』?」

「お、俺…」

落ちかけた煙草を灰皿で揉み消し、かろひじて呟く。

「俺…この小説の中に居た…わつあまで」

*

さつきまで体験していた出来事について話し終わると、シェリル達は神妙な表情を崩さず互いに顔を見合わせる。

「じゃあ…マキさんの意識がこの小説の中に入り込んだってことですか~?」

「まあ… やついう解釈になるな」

「牧本はきっと、小説の世界を擬似現実として体験してたのぞえ」
ディスプレイ画面を鎌子が指で突く。

「感情移入もここまで来たら、ほぼ変態やな」

「う…うつむ」

返す言葉が見つからず、俺はうな垂れるしかなかつた。

さつきの真夏の校舎の中での出来事が、記憶の中にまざまざと蘇る。

書きかけの小説と同じように物語は進んでいた。俺は高校生の主人公になり、登場するのは神楽や辻、東川咲奈といった現実の俺の周りの人間達。

「牧本は今、小説と現実の区別がつかなくなつてるぞえ」

「……」

腕組みをして考え込む俺の肩を、りもんがそつと擦る。

「どれだけ精神が破綻しても、マキさんはマキさんです〜」

「全くフオローになつてないが有難う」

さつきからマウスを弄つていた鎌子が、ディスプレイをこいつこに向けて告げる。

「困つた時は創作仲間に聞くのが一番ぞえ。ちょうど今、チャットのお呼び出しが来たぞえ」

「チャット? 誰から?」

「牧本の天敵ぞえ」

「う、リチウムかつー?」

第10話 銀色塔とリチウムの歯車

リチウム…私の作品にレジマーしないなんて、君も随分偉くなつたね
銀色塔…そ、そんなことは…はは

チャシトのやつとりは、いつもリチウムの上から田線の挨拶で始まる。

それが彼女なりの冗談だとは分かっていても、初手から氣圧されてしまう。

銀色塔…まだ読んでないけど、相変わらず硬質な作品みたいで…

リチウム…褒めてんの？それ

銀色塔…も、もちろん。ハードボイルドな作風で

リチウム…は！？ハードボイルド！？

銀色塔…いやいや！ジャンルはそうではなく…

画面の前でがつくりとつな垂れる俺の背中を、氣の毒そうにこりもんが擦る。

「マキさん、負けないで～！」

「お、応！」

いつまでも圧倒されている場合じゃない。慌てて間髪入れずキーボードを叩いた。

銀色塔…そういえば、ちょっと相談あるんだけど…

リチウム…今更プロットの立て方とかやめてよ

銀色塔…いや、とつき小説書いてる時、ちょっと不思議なことがあって…

リチウム…ん？

さつき俺の身に起こった出来事を、なるべく簡潔にしてレスを綴る。簡潔明瞭がモットーのリチウムにぐだぐだと長い文章を送つていると、すぐ文章指南されてしまうからだ。

俺の後ろではりもん達が興味津々の様子で、チャットのやり取りを覗き込んでいた。

*

銀色塔 ……といつて訳なんだけど、どう思つ？

リチウム ……

椅子にもたれかかり大きく息をつく。

変人扱いされるのを覚悟で洗いざらし話してみたものの、珍しくリチウムの返信に時間がかかる。

3分ほど経つてから、つづやくリチウムのレスが返ってきた。

リチウム：君は病気だね。すぐ救急車呼んだ方が良い

銀色塔 ……！

リチウム：冗談よ。あはは

銀色塔 ……笑えない…

リチウム：気にしなくて良いんじゃない？夢みたいなもんよ

銀色塔 ……リチウムはそういう経験ある？

リチウム：ない

銀色塔 ……そうすか

リチウム：そもそも書き手がそんなに自分の作品に感情移入してちや、客観的に全体が見れないし

銀色塔：確かに。そう言われると思った

リチウム：でもそれくらいの気概も、悪くないんじゃない？

銀色塔 ……なら良いけど…

リチウム…そういうや、その小説にはそのうち私も登場するの？

銀色塔…え？

今日は珍しくリチウムの機嫌が良い気がする。人を寄せ付けない雰囲気を醸し出す、刺々しさが文面から感じられない。

俺の考えを察したように、リチウムが続ける。

リチウム…今日は飲んでるから、機嫌良いのよ

銀色塔…酒飲んでるのか

リチウム…そういうや私、君の顔も知らない

銀色塔…知り合ってからは長いけど、まあそうだね

リチウム…紫衣。坂上紫衣

銀色塔…え？

リチウム…私の名前。『さかがみ』じゃなくて『さかつえ』だから

銀色塔…本名？

リチウム…y e a h

紫衣…坂上紫衣。

唐突に知らされたリチウムの名前に困惑し、思わずキー ボードを打つ手が止まる。

まさかネット上の知り合いであるリチウムの本名を知る機会が訪れる日がくるなど、これまで想像もしなかった。

リチウム…おーい！何止まつてんのよ。君の名前は？

銀色塔…え？

リチウム…女性に先に名乗らせといて、そりや無いわ

銀色塔…あ、悪い。俺は牧本束。束って書いて『たばね

リチウム…ふーん。普段は何て呼ばれてるの？

銀色塔…『マキ』が多いかな

リチウム…じゃあこれから、マキって呼ぶから

銀色塔 …俺は何て呼んだらいい?

リチウム・師匠

銀色塔 …おおおおお!

リチウム・冗談 …紫衣でいいよ

銀色塔 …うん。…了解

チャットのやり取りを覗き込んでいたシェリルが、妙に覚めた目をして言う。

「何やこの会話。恥ずかしくて見てられへんわ」

「…うう、確かにそうかもしけん」

これまで有り得なかつたリチウムとのやりとりは、妙にくすぐつたい感じだ。

酔つてるとはいえ、おそれくリチウムも同じような感覚なのだろう。それからはお互い照れ隠しのような他愛無い話をした後、どちらからともなくチャットを終えた。

*

「結局、現実と小説の狭間の相談はどこに行つてしまつたぞえ」閉じられたチャットの画面を見ながら、鎌子が呆れて言う。

「マキさんの鼻の下が伸びただけです」

「確かに。マキ、創作と恋愛を混同したらアカンで」

「…は、ははは」

ひきつった笑みを浮かべたまま、誤魔化すように俺は煙草に火をつける。

リチウムとは知り合つて3年になるが、俺はまったく彼女の素性を知らなかつた。

これまで実体感の無かつたウェブ上の創作仲間が、現実としてすぐ身近に感じられるのは不思議な気分だつた。

そしてこの時、俺はまだ気付いていなかつたんだ。
俺の周囲の大きな歯車が、既にゆっくりと動き出していたこと。

第11話 琥珀ふたたび

参道の入口にシェリルを停める。

狐集神社と書かれた立て札から中を覗き込むと、夏の陽射しに照らされた池の向こうに本堂の建物が見えた。

「自転車は入れなさそだから、シェリルはここに停めておくか」滴る汗を服の袖で拭いながらスタンドを立てる、シェリルがあからさまに頬を膨らませて不満な表情を浮かべる。

「せつかくこない所まで来たのにー」

「自転車は参道に入れないから、仕方ないだろ

「ちえつ。じゃありもん、マキのこと頼んだで

「はーい、了解です~」

日光浴がてら水槽から瓶に移し変えてきたりもんが、手を大きく上げて返事をする。

「鍵ちゃんとかけてつてえな。盗まれそうになつたら大声出すから、すぐ戻つてきてな」

「鍵もチェーンも付けたから、大丈夫だ」

シェリルのサドルをぽんと叩いて、俺は参道に向かつた。

木々の合間から射し込む陽光を見上げると、絵具のような水色の空の向こうに陰影のはつきりした入道雲が拡がつてゐる。乱反射する池の水面を眺めながら参道を歩くと、じゃりじゃりと心地良い玉砂利の音が響く。

池のほとりにある『狐集池』と刻まれた石碑を指差して、りもんが訊ねる。

「これ、何つて読むんですか~?」

「狐が集まるつて書いて、『こしわいけ』って読むらし~」

「へえ～」

参道には水鉄砲を持った近所の子供たちが駆け回るだけで、参拝客の姿は殆ど無かった。

「にしても、全然人が居ないですね～」

「なにせ1時間以上、自転車こいで来たからな」

汗ばんだシャツをぱたぱたと煽ぐ。

休日にわざわざこんな場所まで来たのは、森琥珀から送られてきた昨日のメールが原因だった。

『明日狐集神社に来て。大事な話があるから。 森琥珀』

突然のメールだった。

七夕の件もあつたので無碍にする訳にもいかず、仕方なく俺は地図を持つて指定された神社に向かった。

手洗い場の水に手を浸していると、きやつきやと笑いながらりもんが手洗い場に飛び込む。

「きやあ～！冷たいです～！」

「こ、こらつ！神聖な清め水に飛び込むな！」

「故郷の阿寒湖を思い出します～」

湯船にでも入っているように手洗い場に浸かっているりもんを見て、苦笑いする。

漱いだ口を拭つていると、七夕の夜に触れた琥珀の唇の感覚を思い出す。

幼馴染で喧嘩相手でもあつた筈の琥珀は、月日の経過とともに一人の女性に変わっていた。

「どうかしましたか～？マキさん」

「あ、いや…何でもない」

頭の片隅に残っている記憶を振り払うように、俺は柄杓ですくつ

た水を頭からかけた。

*

神社特有の澄んだ空氣の中、蟬の鳴き声だけが響く。
参道で辺りを見渡していくと、唐突に俺を呼ぶ声が境内に響き渡つた。

「束つ！たばねつ！じじ、じじつ！」

本堂の脇のおみくじ売り場から聞こえてきたその声に振り返ると、そこには巫女姿の琥珀が居た。

「え…？お前…」

周りの田など全く気にせず無邪氣に手を振る琥珀の姿に、ふと昔の面影が見え隠れする。

「つてか来たな！たばね～！」

セミの鳴き声が止むほどどの甲高い声で、琥珀は裏口から駆け出してくる。

「恥ずかしいから」力い声だすな

「また照れちゃつて～」

馴れ馴れしく琥珀は俺の腕に手を絡ませる。

「まさか…琥珀、ここで巫女さんやつてんのか？」

「似合う？似合つ？」

巫女装束の袖を握つて、琥珀はその場でぐるりとターンして見せる。白い小袖に緋袴、髪を後ろで結わえた見事な巫女姿だった。

「つてかどう？可愛いだろ？」

「ま、まあ…馬子にも衣装つて感じだな

「似合うつて言え！」

視線を逸らす俺の肩を小突きながら、琥珀は悪戯な笑みを浮かべる。

「ひらやうじタのじなど、全く覚えていないようだつた。

「というか、お前20歳超えて巫女さんやるなよ」

「しつー！」のバイト18歳って言って入ったんだから

小ちく舌を出す琥珀の無邪気な仕草は、子供の頃から変わっていない。

「お前なあ…この間はマニの浴衣で、今回は巫女さんか？」

「つてか言ってなかつたつけ？私のバイトつて、コスプレ専属だよ

「コスプレ専属？」

「そ。巫女さんに織姫にサンタ、バレンタインはキューピッドだしハロウィンには魔女になるよ」

「はあ…」

「つてか信じてないのか？あつち見てみな

口を尖らせた琥珀の指差す方を振り返ると、そこには一眼レフカメラを構えたいかにも胡散臭い男が望遠レンズのファインダー越しにこちらを見ていた。

「な、なんだありや…？」

驚く俺に向かつて、カメラを構えたその男はファインダーを覗いたまま一直線に近づいてくる。

「う、わっ！」

その勢いに思わず仰け反ると、メタボリックな体型に長髪の男はカメラ越しにぼそりと言つ。

「僕は森琥珀第一護衛隊隊長、島田以蔵と申します」

「ご…護衛隊？」

「左様。日夜、琥珀様をお守りするのが我が護衛隊の使命であります」

こんな分かりやすいキャラクタが現実に存在していることに、俺は言葉を失つた。

「し…知り合いか？琥珀」

「追っかけみたいなものよ、私の」

「お、追っかけ！？」

島田以蔵と名乗った男は、相変わらずカメラのファインダー越しに俺と琥珀を見つめる。

「それより、あなたこそ何者ですか？ やけに琥珀様と親しいようですが……」

「あ……ああ。俺は琥珀の遠縁の親戚で……」

「幼馴染、というやつですか？」

「まあ、そんな感じかな」

「……それは……羨ましいです」「

ファインダーを覗き込んだまま、以蔵はがっくりと肩を落とす。

そんな以蔵とのやりとりなどお構いなく、琥珀が俺の腕を無造作に引っ張る。

「つてかそれよつさー…さつきから束の隣に居る娘、誰よ？」「え？」

「あ、確かに…僕も気になつてました。その全身緑色の「スプレをした娘さんです」

「お、俺の隣つて…？」

怪訝そうな顔をする琥珀と以蔵を横目に、誰も居ない参道を俺は見渡す。さつきから俺の隣に居る”緑色の「スプレ娘”と言えば一人しか居ない。

「はーい！りもんつて言いますー！」

りもんは小学生のように勢いよく手を上げる。

「ん~見たところ、あんた人間じゃないね。つてか妖怪か何か？」

「りもんは妖怪ではなく、マリモの妖精です～」

「はーん、なるほどね」

納得したように琥珀は腕組みをする。

「え…琥珀…お、お前達、りもんが見えてるのか！？」

絶句する俺に冷ややかな視線を向け、琥珀がにやりと笑う。

「巫女パワー、なめんなよ」

*

「その頭に生えているのは、アホ毛ですか？」

「りもんのこれは、触手です～」

「凄い。まるで本物みたいだ」

島田以蔵は相当りもんが気に入つたらしく、せつせつと撮影会の如く写真を撮りまくつていた。

「お近づきのしるしに、是非ポーズを！」

「ひつですか～」

「おおっ！ナイスポーズです！接写接写！次は触角をつまんで～

「照れますね～」

「おおっ！すばらしく～！人間離れした可愛さです～！」

日陰になつた本堂への石段に座つて、俺と琥珀はそんな二人の様子を眺めていた。

「まあ…人間じゃないからな」乾いた溜息混じりに琥珀に話しかける。「まさか擬人化した毬藻がお前達にも見えるとは思わなかつた

琥珀は吊り気味の瑠璃色の目を細める。

「つてかイメージの共有化みたいなもんじゃない？」

「そんなもんか？」

「そんなもんなのよ、現実なんて」

珍しくペシミスティックな言葉を口に出しながら、琥珀は悪戯じみた笑みを浮かべる。

俺は頬杖をついて、汗ばんだシャツを扇ぐ。

「琥珀、何か俺に用があるんじゃないのか？」

「あ、そうだった。つてか束、秋になつたらこの神社でお祭りあるんだけど、空いてる？」

「まあ…たぶん」

「じゃ、じゃあ来いよ！狐火が綺麗なんだぜ！」

「へえ」

「つてか『へえ』じゃねえよ！絶対来いよ！約束だからな！」「乱雑に緋袴の裾をはたいて、琥珀は立ち上がる。「じゃあ、今日は帰つていいから！」

「…え？用事つてそれだけ？」

「つてか、い、いいだろ！ネットアイドルの巫女姿見れたんだしつ！」

「メールで伝えれば断然早い話

「つるさいなつ！アホたばねつ！」

小さく舌を出して、琥珀はおみくじ売り場に戻つていく。

感情が表に出たつになると、必ず舌を出し『アホ』と言つのが琥珀の昔からの口癖だった。今でも変わらないその仕草にどこかホッとしたながら、靴を脱いで石段に足を投げ出す。

高くなつた夏の太陽が頭上から照りつけてくる。
ひんやりとした石段の感触が、素足に伝わってきた。

第1-2話 ギミック世界のワンドララー（その2）

真っ赤にした顔を手で覆い、東川咲奈は疾風のよつに廊下を走り去る。

「ふええ…痛ええ」

柱に強打した後頭部を押さえて俺が目を回していると、神楽があきれて言つ。

「マキ、お前ホンマに大丈夫か?」

「……」

記憶の混乱は相変わらず続いていた。

ついさっきまで俺は別の世界に居て、今とは全く違つ生活を送つていたような気がする。…あれは、妄想なのだろうか?

しゃがみこんだ辻が、俺の頭に出来たたんごぶを擦る。

「咲奈ちゃんがマキ君を好きなのは皆知ってるけど、付き合える筈がないのだ」

「へ…? なんで?」

尋ねると、辻はバツが悪そうに人差し指で頬を搔いて神楽と顔を見合わせる。

「だつて…なのだ、ねえ」

小さく溜息をついた神楽が、俺の腕を掴んで引き起しす。

「お前には彼女、居るやろ?」

「俺に…彼女?」

その時、やたらと甲高い声が廊下に響く。振り返った瞬間、子供の頃から見慣れた無邪気な笑顔がすぐ間近に迫っていた。

「つか束ー! おはよー!」

「ー、琥珀つー?」

飛びついてきたのは、制服姿の森琥珀だった。

「つてか久しぶり！寂しい思いさせなんなよつー。」

「な、夏休みだから仕方ないだろ……」

「今度海行くよ！花火もキャンプも浴衣も、夏はイベント盛りだくさんだよつー！」

「いや、あのや……」

俺の首にしがみついてクルクル廻る琥珀を、なんとか引き離す。

「神楽、まさか俺の彼女つて…琥珀か？」

「ちやうちやう。お前ら親戚やろ？」

「つてか、遠縁だから結婚できるもんね！」

「あのなあ……」

記憶は相変わらず曖昧なままだけど、琥珀は確かに東川咲奈と同じ1年生だった気がする。

「でも琥珀、学校で何やつてんだよ？お前美術部じゃ無いだろ？」

「つてか今日は、動画サイト投稿用のイメージビデオ撮影会」

「撮影会…つてことは？」

いぶかしげに辺りを見渡すと、窓の外にカメラを構えた人影が俺と琥珀を覗いていた。

「……やっぱり貴様か、島田以蔵」

「牧本くん、先輩を呼び捨てしてはいけませんよ」

ファインダー越しにそう言つと、以蔵は窓から這い上がつてくる。

「せ、先輩！？以蔵つて先輩なのか？」

振り返ると、辻と神楽が両手を広げて呆れた表情をして答える。

「うちの学校で知らない人は居ないのだ。3年の島田先輩」

「接写の以蔵”やな。ま、どっちかといつと変わり者で有名やけどな」

「はあ……」

島田以蔵は制服のズボンの埃をはたきながら、琥珀に言ひつ。

「さあ琥珀様、撮影会の用意ができましたよ

「つてか、せつかく束に会えたのに～」

「さ、護衛隊の皆が待つてますから」

以蔵に襟首を掴まれて引きずられていく琥珀が、大きく両手を振りながら叫ぶ。

「束～！今度狐集神社の秋祭りに行くよつ～。」

「へえ」

「つてか『へえ』じゃないよ！絶対行くよ～や、約束だからな～！ア

ホ束～！」

舌を出して悪態をつく琥珀の声を聞きながら、ふと思ひつ。

（どこかで…同じ場面があつたような…）

窓の外に照らされた夏の陽光と同じように、いつまでも俺の記憶の欠片がチカチカと瞬きを繰り返していた。

「あれ？マキさんも今帰りますか？」

「ん…ああ」

会社の帰りに駅で電車を待っていると、後ろから珍しく東川咲奈に声を掛けられる。

雑然としたプラットフォームの喧騒の中、隣に並んで立った彼女はまじまじと俺の顔を覗き込んだ。

「映画観に行く約束、覚えてます？」

「あ、ああ…もちろん」

ホームに入ってきた地下鉄の無機質な銀色の車両に乗り込みながら、ネクタイを緩める。最近は琥珀に振り回されっぱなしで、東川咲奈との映画の約束もまだ実現していなかった。

並んで吊革に掴まりながら、ぽつりと愚痴る。

「やつぱり会社員は向いてそうにないな、俺」

投げやりな俺の言葉にも、東川咲奈は笑顔を崩すことなく話しかけてくる。

「はこマキさん。餟あげますから」

「子供か」

栗鼠のようにくじくじした瞳を眼鏡の奥で輝かせ、東川咲奈は鞄から取り出したマーブル模様の餟を俺に手渡す。

「東川って、いつもどんな映画観るの？」

「そうですね。1950年代フィルム・ノワールとか

「…マジで？」

まさか映画の趣味がここまで一致するなんて、全く予想していな

かつた。シーカルで破滅的なノワール映画が趣味の女性など、これまで会つたことがない。

「そういう退廃性や閉塞感、私、嫌いじゃないんですよ」

「普段はそんな風に見えないけど……」

「人つて、いろんな面を持つてますからね」

車内の白い電灯に照らされた彼女の横顔は、どこか少し寂しそうに見えた。

電車が次のプラットフォームに入り、窓から見える誘導灯の単調な風景が急に明るくなる。アナウンスを聞いた東川咲奈が、口の端を上げて微笑む。

「あ、マキさんごめんなさい。ここで乗り換えなんで……」

「あ、そうなんだ」

「じゃあ、明日、また」

ホームに下りた小柄な東川咲奈の後姿を、電車の窓から眺める。ゆっくりと走り出した電車に向かって、彼女は小さく手を振った。

その時、ふと思いつ出す。

確かに彼女が普段通勤で使っているのは、地下鉄の路線じゃなかつたはずだ。

「あれ……？」

足早に通り過ぎる人混みの中でホームに一人だけ立ち止まる東川咲奈の姿が、次第に小さくなっていく。彼女は俺の乗った電車を、いつまでも見つめていた。

*

翌日、東川咲奈が会社を辞めるのを知った。

「ああそう、東川さんは盆休み明けで退職するから

書類を提出しに行つた時に課長から聞かされたのは、その一言だけだった。

茫然とデスクに戻り、引き出しを開けて彼女に貰ったキャンドイの一つを口の中に放り込む。見ると東川咲奈はいつも通り、笑顔を絶やさず仕事をしていた。

何となく、分かった気がする。

唐突に映画に誘つたのも、昨日俺の使う電車の路線で偶然を裝つて乗り合わせたのも。

「地元に戻るらしいぜ」

「ボーナス貰つてから辞めるんだから、今の子はしつかりしてんな、ははは」

「それより次の人員補充は……」

彼女の居ない所で囁かれる職場の同僚の陰口を聞きたくなくて、俺は席を立つた。

喫煙所に向かう途中にすれ違つた東川咲奈が、いつものように微笑んでくる。

「東川……」

声をかけると、彼女は黙つたまま首を少し傾げる。ほんの数秒の沈黙が、今はそれを語るべきタイミングではないことを示していた。

「……今度、メールするから」

「……はい」

それだけの短い言葉を交わし、職場に戻る彼女の後姿を見送る。

甘酸っぱいキャンディの味だけが、口の中にいつまでも残つていた。

第14話 水の世界より

「最近ブログ更新していないね。サイトにも来てないし新作もアップしない」

乗り気のない俺とのチャットのやりとりで、紫衣の微かな苛立ちが画面を通して伝わってくる。

「最近ちょっと忙しくて…サボってすんません」

「停滞期があるなんて贅沢ね。そもそも君、まったくもって気概が足りないのよね」

ディスプレイの前で苦笑いしながら、煙草に火をつける。

見上げた天井に、青白い煙草の煙がやらゅらと漂う。

…頭の中にその煙と同じような靄がかかり続けていた。

理由は分かっていた。東川咲奈のことだ。

彼女の退職の話を聞いてから、ずっと俺の気持ちはモヤモヤと淀んだままだった。

退職までにはまだ時間はあるし、その間も会社で毎日顔を合わせる。そもそも今度の日曜に映画と一緒に観に行く約束もしているのだから、話ならそこでいくらでもできる。

なのに…このすつきりしない気分は、何だ？

「こら！寝落ちするなら言ひなさいよね！」

痺れを切らした紫衣のレスが返ってきたのに気付き、煙草を咥えたまま慌ててキーボードを叩く。

「あ、いや…起きてるよ」

「やる気ないわね」

「こやあ…悪いっす

再び止まつた会話に溜息をついた瞬間、紫衣の言葉が画面の上に現れる。

「女絡みでしょ？」

「え、あ、いや…」

一瞬の躊躇が命取りだった。これは所謂”カマをかけられた”的だが、そんな思慮が廻るほど俺には気持ちの余裕が無かつた。

図星をつかれ、思わず素直に答えてしまう。

「なんで…分かつた？」

「作家の生命線は観察力と洞察力。そのくらいはチャットの文面からでも読み取れるわ」

「マジですか…」

「…」いつ時の女の勘はおそらく鋭く、取り繕おうとすればするほど男はその手の上で踊らされることになる。

結局、俺は東川咲奈のことを洗い浚い喋らされる結果になってしまった。

*

話を聞いた後、一呼吸置いて紫衣はレスを返していく。

「その娘、マキのこと好きなんだね」

「や、そんなこと…」

思わず落としそうになる煙草を慌てて灰皿で揉み消す。画面の向いの紫衣の視線が、少し意地悪なものに変わった…気がした。

「相手はマキに好意を持っている。そしておそらく本人もそのことこ
気付いてる」

「…」

「で、マキはその娘に何をしてあげたの？」

「な、何って…」

「はあ…君、あんぽんたんなの？」

紫衣が何を言いたいのか、分かつてた。

赴くままに潮流に身を委ねるのか、あえて立ち止まって流れを遮るのか、それとも何処にも辿り着かず水の底で水面を見上げているのか。

キーボードから手を離し皿を開じると、皿蓋の裏に東川咲奈の微笑が映る。

彼女は、いつも笑つてた。

それはきっと、彼女がいちばん俺に見せたい表情だつたんだ。

「そつか…分かつた気がするよ

「なら、良かつた」

紫衣との会話はそれで充分だつた。

俺が水の中を漂う魚だとしたら、きっと紫衣は水面から仄かに海中を照らす月明かりなかもしれない。

ふと、そんなことを思った。

第15話 ギミック世界のワンドラーラー（その3）

「じゃあ俺の彼女つて、ひょっとして…」

校舎の階段を上りながら尋ねると、团扇を仰ぐ神楽がいかにも白けた目で振り返る。

「ひょっとしても何もあらへん。お前の彼女は坂上紫衣に決まつたるやう!」

「……紫衣

階段を上る俺の足が止まる。

坂上…紫衣。

そうだ。この学校に入学してすぐ、俺は紫衣と付き合い始めたんだ。

入学式の日、クラスの隣の席であいっは頬杖を付いて窓の外を見ていた。話しかけると、随分と素つ氣無い返事が返ってきたのを覚えている。

あいつも同じ美術部で、抜群に絵が上手かった。油絵なんて描いた事もなかつた俺の隣でイーゼルを立てていたのは、いつも紫衣だった。

「俺達は今も…付き合つてるとか

ぱりぱりと頭を搔き龜る。ピースがバラバラになつたパズルのように、さつきから脳の記憶中枢が混乱していた。

その時、再びパタパタと廊下を響き渡る上履きの音に振り返ると、慌てて駆けて来たのは東川咲奈だつた。

血相を変えてただならぬ様子の東川咲奈に、神楽が逸早く声をか

ける。

「どないした！？東川」

「せ、先輩達！は、はやく美術室に、来てくださいっ！」

息を切らした東川咲奈が、俺や辻の服を引っ張り美術室の方へ走り出す。

「お、おいつ！」

「さ、坂上先輩がつ！大変なんです！」

「紫衣！？」

ただならぬ緊張感に、俺はバッグを放り出し美術室に向かつて駆け出した。

*

美術室のドアを勢いよく開けた俺の目に飛び込んできたのは、キャンバスに向かう紫衣の姿だった。

薄手のキャミソールにデニムのショートパンツ。まるで海にでも行くようなラフな格好で、紫衣はキャンバスに筆を走らせていた。制服のあるうちの学校で、夏休みとはいえ平氣でこんな格好をしてくるのは紫衣しか居ない。

入口で立ち竦む俺の背中に、神楽や辻がぶつかつてくる。

「こ、こらマキッ！見えへん！」

「押さないでほしいのだ〜」

「だ、大丈夫ですか〜！」

背後から覗き込む皆の目が、紫衣に釘付けになる。

紫衣は…頭にダンボールの箱をかぶっていた。

照りつける陽射しに窓の外の蜃氣楼が揺らぐ中、異様な緊張感が俺達の間に流れる。

「し…紫衣？」

「あんた達、何してんの？」

いつものように全く愛想の無いその声は、間違いなく坂上紫衣の声だった。

「……」

明らかに狼狽している皆の気配が、背中越しに伝わってくる。茶色のダンボールを頭にすっぽりとかぶった紫衣は、何事もないようにキャンバスに向かっていた。

「ど、どうしたんだよ？ それ…？」

明らかに動搖した声色で質問する俺の方を振り返り、紫衣は平然と答える。

「これのこと？」

指で弾いた箱の側面が、小さく揺れる。

紫衣のかぶつている箱には田の部分に20センチ程の切れ込みが入つていて、そこが覗き窓になつていていたようだった。だが覗き窓の奥は陰になつていてよく見えない。

この場の異様な緊張感をほぐすように、俺はあえて軽口を叩いてみた。

「…口、口ボットの真似かな？ もしくは…人に見せられない顔になつたとか？」

「あんた、ぶつとばすよ」

筆を走らせながら、紫衣は冷ややかに言つ。表情は見えなかつたけれど、そこには間違いなく普段と变らない紫衣が居た。唚然としながら、俺は恐る恐る隣の作業椅子に座る。

「い…いつからそれ、かぶつてるんだ？」

「3日くらい前から。お風呂の時は脱ぐけど、それ以外の時は」

「家でもかぶつてるのか！？ それ」

「さつきから、あんた何言つてんの？」

「ちからを振り向こうともせず、紫衣は平然とイーゼルの高さを調整する。

誰も何も言わなかつた……いや、言えなかつた。
じつとした嫌な汗が、俺の背中をつたう。
窓の外で、蝉だけがうるさく鳴り響いていた。

今日ほど映画に集中できなかつたのは、初めてかもしない。

ミー・シアターの薄暗い座席に座り、ちらと横目で東川咲奈の方を見る。夏らしいパステルチェックのワンピースを着た彼女は、会社で見る時と全く印象が違つていた。

栗鼠のような彼女の黒い瞳に、スクリーンの白い明かりが映る。

彼女が選んだのは、デートのチョイスにしては渋すぎる60年代フィルム・ノワールの映画『黒衣の女』だった。

俺の視線に気付き、彼女は少し頬を赤くして微笑み返す。特に会話は無かつたけれど、それでいいと思つた。

東川…咲奈。

俺の前では、なんでそんなにいつも嬉しそうなんだ？

彼女は四国故郷に戻り、服飾系の専門学校に通つつもりだと言つていた。

今日が終わつたら、おそらくもう一度とこつて一人で会う機会は無いだろう。

(最後…だから?)

そうか…だから、彼女は笑つている。

俺も…。

でもそれで…良いのだろうか？

スクリーンに映る窓辺に座る黒衣の女の姿を見つめながら、俺はいつまでも彼女の笑顔を思い返していた。

*

映画を観終わった後、一人で近くの公園に行く。薄曇りの空から時折小粒の雨が降りだしていた。

お互い話したいことはたくさんある筈なのに、ベンチに座つても何故か言葉が喉の奥から出でこない。

いつもと違う空気が、俺と東川咲奈の間を包む。

「東川や、やっぱり会社辞めた後は地元に戻るのか？」

「…そう、ですね」

小声でそう呟くと、彼女は足を揃えて曇つた空を見上げる。艶のあるウエッジヒールがカチンと音を鳴らす。彼女が洒落た深い紺色の眼鏡をしていることに、俺は初めて気付く。

「東川…あのや」

「はい？」

首を傾げ覗き込む東川咲奈に、ひとつ息をついて俺は口を開いた。

「…うちに残るつもりはないか？」

「でも、もう部屋も引き払っちゃうし…」

「なら俺のアパートと一緒に住めばいい」

「え！？」

親譲りの無鉄砲で…というのは『坊ちゃん』だったか。

恋愛に関して駆け引きや計算が出来るほど俺は器用じゃないし、思つたことをそのまま言つて墓穴を折つたことはこれまでも山ほどある。

「狭いけど俺のアパート、2部屋あるし」

「それって…」

膝の上のバッグを小さく弄りながら、彼女は俯いた。

ぱたぱたと振り出した雨が池の水面を叩き、円周状の波紋が次第に水面に拡がっていく。公園のさつきまでの賑やかさが、雨の音と共に静寂に変わる。

途中で買ったビニール傘を拡げて差し出すと、彼女は寄り添つよう傘の下に入った。

その時、黙つて俯いていた東川咲奈が消え入るような小さな声で言った。

「…」めんなさい。すごく…すごく嬉しいけど…もう、無理です

彼女は初めて俺の前で笑わなかつた。

傘の端から、ぽつり、ぽつりと、透明な雨の雫が落ちていた。

第17話 フラれ男の休日は

「あははははははは！玉碎男～！」

携帯電話の向こう側から、けたたましい坂上紫衣の笑い声が聞こえてくる。

「まさか本当に告白するつて…マキって真性の馬鹿…？」

「そつちだつて煽るだけ煽つたくせに」

電話越しに悪態をつきながら、自販機の陰にショリルを停める。盆休み2日目の今日、俺は朝からサイクリングをしていた。

「あはははーでもマキらしいじゃない。天晴天晴～」

「あんなあ…」

携帯電話から相変わらず紫衣の嬉しそうな声が続く。

昨日の雨が嘘のように眩い陽射しが照りつける空を見上げ、自販機でペットボトルの水を買う。

自販機の陰に座り込み、荒々しく開けたペットボトルの水を一気に半分ほど喉に流し込んだ。

「シャツの裾で汗を拭つていると、シェリルが俺の頭を撫でる。触り心地、芝生みたいや～」「人の頭を撫で撫でするな

今日起きてすぐ、バリカンで頭を丸刈りにした。

「決して昨日東川咲奈にフラれたからではないからな

「あ～めつちや気持ちええ～」

「聞いてんのか」

投げやりにそう言って、俺の頭を両手で触り続けるショリルにペ

ツトボトルを渡す。

「ん? 誰か一緒に居るの?」

「あ、いやいや。何でもない」

怪訝そうな紫衣の声に慌てて携帯を持ち変えたと、紫衣は珍しく柔らかい声で言った。

「…でもさ。なんかすっかりしたみたいじゃない?」

「まあ、そういうだな」

実際、何日か数日の心のモヤモヤは不思議と消え去っていた。

「じゃあマキって、今日空いてる?」

「…え?」

「実は今日も、私の参加してる劇団の舞台公演あるんだけど、見に来ない?」

「きょ、今日ー?」

「…うん。夕方」

紫衣は小説以外にも、演劇や絵画などの様々な創作活動に携わっているらしい。

「やつぱり急だつたから…無理?」

躊躇する紫衣の声に、勢いよく返す。

「いや大丈夫、行くよ」

「やつたね!」

子供のよつよつしたやべる紫衣の声を、初めて聞いた気がした。

*

携帯電話を閉じると、シェリルが銀色の髪をかき上げながら背後

から覗き込んでくる。

「紫衣に会つんなら、髪切ったの失敗やつたなあ…。マキ、坊主頭

全然似合つてへんよ」「

「まあ芝居観に行くだけで会つ訳じゃないから、構わないだろ

「ええ~!~紫衣と会わへんつもり?」

「いいのさ、それで

立ち上がり大きく背伸びをすると、汗ばんだ体を爽やかな風が撫でる。

「そもそもマキだつて、誰が紫衣か分からへんのさやう? わざわざ誘つたからには端役やないと思つけど…」

「ほり、行くぞ」「

腕を組んでぶつぶつと言い続けるショリルのスタンドを上げる。

俺と紫衣の関係は、きっとそういうものなのだろう。

見上げると、真っ青な空の向こう側に大きな入道雲が拡がつていた。

第1-8話 ギミック世界のワンドラーラー（その4）

「…」か暢気なセミの鳴き声だけが、美術室に響き渡る。
箱をかぶった紫衣と啞然とする仲間達の間で、変な汗が俺の背中
をつたう。

「…」の異様な緊張感を和ませうと、その場を取り繕つよつて紫衣に
近寄る。

「ま、まあ。といあえずその箱をいつたん脱いで…」
そう言つて箱に触つた瞬間、紫衣の裏拳が俺の顔面に炸裂する。
「げはつ…」

筆を手にしたまま、紫衣は箱の位置を元に戻す。

「勝手に触らないでよ。窓の位置がずれたでしょ
「お、お前はつ…」

「マキ先輩、鼻血鼻血！」

東川咲奈に渡されたティッシュで鼻血を拭いながら紫衣に詰め寄
る俺を、辻が慌てて押し留める。

「まあまあ～。とにかく坂上はその箱を脱ぐつもりはないのだ？」
紫衣はあきれたように首を振つて、両手を広げる仕草をする。

余計に重くなつた空気が辺りを包む中、腕組みした神楽が唸る。

「…それよかどうすんねん？部長達、もうすぐ来るで」

確かに部会の集合時間が迫つていた。他の部員達が「…」の紫衣の姿
を見たら、何と言つだろう？

当の紫衣だけは、全く俺達の心配など意に介さない様子でキャン
バスに筆を走らせていた。

その時、辻が俺の肩を叩いて胡散臭い微笑を浮かべる。

「とりあえず、何とかマキ君が坂上を外に連れ出すしかないのだ」「何とかしようとして、さつき裏拳くらつたんだが…」

神楽も団扇を扇ぎながらもありなんと頷く。

「お前彼氏やる。何とかせい」

「ぐ、こんな時ばかり…。つたく」

階に急かされて、俺はしぶしぶ紫衣の腕を掴む。

「紫衣。箱はかぶったままでいいから、ちょっと外に出よう」

「画材入れに乱雑に筆を放り込んで、明らかに不機嫌そうに紫衣が振り返る。

「何でよ? 部活でしょ?」

「話…あるんだよ。大事な話」

「……」

「」の状況以上に大事な話などあるはずが無いのだが、それくらいしか紫衣を連れ出す方法が思いつかなかつた。

暫く黙つた後、紫衣は仕方なく椅子から立ち上がる。

「あ~もう。せっかく良い調子だつたのに」

「何でもお~るから。さ、さ」

俺は紫衣のバッグを脇に抱え、もう片方の手で半ば紫衣を押し出すように美術室のドアを開ける。

「部長には適当に言つとこってくれ

「了解です~」

ホッとした表情を見せる階に見送られながら、紫衣を抱えたよう

に廊下に出た。

*

離せ離せといつる紫衣にさんざ小突かれながらも、何とかひと
氣のない校舎裏まで紫衣を連れて行く。

なるべく人目に付かない運動部倉庫に忍び込み、パイプ椅子に機
嫌の悪い紫衣を座らせる。

「なんでこんな所に連れてくるのさ? イヤラシイわね」

「な、何言ってんだ」

悪態をつく紫衣のダンボールをかぶった姿を見ていると、自然と
溜息が口から漏れる。

どうして俺の周囲には、こんなカオスな状況が常に満ち溢れてい
るのだろう?

「そもそも、なんで箱なんてかぶる気になつたんだよ?」

「…ここから見える世界、これまでと全く違うのよ」

少し落ち着きを取り戻した紫衣が、ピンク色のサンダルに付いた
砂を払いながら言つ。

「そりや視界は変わるだらうけど…」

「違うわよ。そういうことじやなくて」

首を傾げた紫衣が俺の顔を覗き込むと、その覗き窓から微かに紫
衣の紺色の瞳が見えた。

「本当に世界が変わるよ。君もかぶつてみれば解るから」

「バカ言え。そもそも…お前が今どんな表情をしてるのかすら、俺
には分からなじやないか」

「マキを、見てるよ」

そう言つと紫衣は立ち上がり、寄り添つよつに俺に近づいてくる。

「……え?」

紫衣はかぶつた箱を頬の辺りまで上げ、そして突然…俺にキスを
した。

無機質なダンボールの匂いに混じつて、いつも紫衣が付けている

甘酸っぱい香水の匂いがした。

「お…お、おい…？」

数秒間のキスの後、体を硬直させたまま茫然とする俺に向かって、再び箱をかぶり直した紫衣が囁つ。

「キスは別」

ひび割れた倉庫の窓から、プリズムのような夏の陽射しがチカチカと射し込む。

鳴り止まない蝉の声が、いつまでも耳の奥に残っていた。

第19話 天井桟敷の人々

小劇場の向かいにシェリルを停め、雑居ビルの2階にある入口に鎌子と向かう。

寒冷地育ちで暑さにめっぽう弱いりもんを冷蔵庫に入れて、今日は鎌子をポケットに入れて連れてきた。

オレンジ色の夕陽の射し込む中、案内板の掲げられたビル脇の狭い階段を上る。

両側の壁には劇団のポスター やチラシが所狭しと貼られていた。

薄暗い階段を上りながら、鎌子が言つ。

「牧本と二人きりで出かけるのは、初めてぞえ」

「そうだっけ?」

「カマキリは秋になると産卵期だから、そろそろ牧本の子種を仕込む時期ぞえ」

「そしたら俺食われるんだろう?」

「ジョークぞえ」

「お前の冗談は、解り難い」

そんな戯言を交わしながら階段を上ると、切れかけた白熱灯が受付のある狭い踊り場を照らしていた。

演劇を観に来たのは初めてだった。

木製の扉を開けて劇場の中に入ると、前方のステージに向かって階段状の客席が作られていた。客席といつても映画館のようにクッションのきいたシートがある訳ではなく、階段がそのまま座席になつていてる。

100人も入れば満員になるくらいの狭い劇場だったが、既に8割ほど客席は埋まっていた。

「思ったより本格的だな」

舞台の上の照明やセットを見渡しながら、俺と鎌子は一番奥の桟敷席に座る。

「牧本、緊張してるぞえ？」

「まあ…どことなく」

紫衣との初対面が演劇の舞台なんて、思ってもみなかつた。

「…紫衣は、きっと俺の知らない多くの世界を知っているんだな」

「そう。世界は広いぞえ」

公演時間が近づき埋まりつつある劇場の客席が、自然と臨場感と熱気にはまれていった。

*

客席が暗転し、舞台のライトが灯る。

この芝居には主に3人の女優が登場した。

恋人を事故で失った女性とその友人、そして主役の女性に歪んだ思いを寄せる謎の女が中心となつて芝居は進んでいく。

心象風景や時間軸を遡つた場面が入り混じる難解なストーリーは一般的に好まれる内容では無かつたが、巧みな照明や生の役者の台詞廻しの迫力に圧倒される。

観る前には大げさでいかにも演技臭いものをイメージしていたが、実際の臨場感は全く違つていた。

桟敷席で芝居に見入る俺に、隣の鎌子が小声で囁きかけてくる。

「牧本、誰が紫衣か分かつぞえ？」

「……ああ」

俺が視線で示したのは、主役に歪んだ愛情を傾ける背の高い金髪の女。

決して台詞は多くないけれど、時折観客席に向ける冷徹でどこか偏執さを含んだ眼差しは、ひとりわその存在感を際立たせていた。

振り乱した金髪の前髪から覗く、吸い込まれそうな黒い瞳。リチウムの小説の登場人物と同じ、硬質な冷酷さと燃え盛る情愛を表裏に備えた人物像。

あれは……紫衣そのものだつたんだ。

*

芝居が終わり客席が明るくなつても、俺は茫然と舞台を見つめていた。

痺れを切らした鎌子が、服の裾を引っ張る。

「終わつたぞえ、牧本」

「あ……ああ」

ぼんやりと立ち上がると、鎌子は俺の顔を覗き込んで言つ。

「牧本つて、実は演劇好きなんぢやないか？ぞえ」

「……」

芝居は紫衣の演じる女の死で、幕を閉じた。

俺にあんな脚本が書けるのだろうか？

そんなことばかり考えながら出口から階段を降りかけた時、背後で突然大声が聞こえた。

「マキ！ 牧本たばね！」

突然人混みの中で自分の名前を呼ばれ、驚いて振り返る。

関係者が混み合つ控え室から顔を覗かせ、金髪の女が手を振つていた。

「……紫衣？」

「マキ！」

「マキ！」

紫衣は舞台衣装のまま駆け寄つてくる。

さつきまでの獵奇的な役柄とうつて変わつた様子に周囲の人々が
どよめくが、そんなことなどお構いなく紫衣は陽気に話しかけてく
る。

「君ー何さつさと帰るひとしてんのさー」

「え…ていうか…どうして俺だつて分かつたんだ?」

動搖する俺を尻目に、腕組みした紫衣は口の端を上げて笑う。

「ははん、すぐ分かつたよ。舞台に居る時から

「…あの客の中で?」

「舞台からつて意外と観客の様子がよく見えるのよ。すぐ天井桟敷
の坊主頭がマキだつて分かつたよ」

「……マジすか」

啞然とする俺を見ながら、紫衣は暢気に笑い続けていた。

第20話 ニア・セックス

一日酔いで痛む頭を抱えながら眼を開けると、すっかり高くなつた陽の光がカーテンの隙間から射し込んでいた。

「…痛てて」

視界の片隅に映る絨毯の上には、何本ものビール缶とワインの瓶が転がっている。

劇場を出た後、うちあげと称して俺と紫衣は居酒屋で6時間近く酒を飲み続けた。

途中から記憶が途切れがちになり、最後の辺りでは俺はほとんど意識を失っていた。

回らない呂律で俺を指差す紫衣の姿や、居酒屋の喧騒が渦巻きのようになり視界の中で歪んでいったのをかすかに覚えている程度だ。

「うう…飲みすぎた」

白いシーツにぐるまつて陽の光を遮る。

シーツの隙間から、ソファーで膝を抱えている鎌子が見えた。

「起きたぞえ？ 牧本」

「うう…どこだ？」

ぼんやりとそんな質問をしながら寝返りをうつた瞬間、明らかに男とは違う柔らかく温かい人肌に触れる。

「…………え？」

シーツの中で寝息を立てる紫衣の顔が、すぐ間近にあつた。

「なっ！？」

慌てて飛び起きシーツをはがすと、同じベッドの隣で紫衣が猫のようになまつて下着姿で眠っていた。

よく見ると、俺も下着しか付けていなかつた。

「う、うわー！うわー！」

辺りに脱ぎ散らかしてある洋服を慌てて体に巻きつける。
動転する俺を見ながら、鎌子がソファーから立つて不思議そうに近づいてくる。

「どうしたぞえ？ 牧本」

「こ、これ… どういうことだ？」

「昨日は牧本も紫衣も酔い潰れたから、ホテルに泊まつたぞえ」
きょとんとした表情のまま、鎌子は平然と言つ。

見渡すと、確かに見たこのない部屋だつた。

「でもでもー何で下着なんだよー？」

「暑かつたからぞえ？ 牧本達は自分で服を脱いで寝たぞえ」

「… どうか」

とりあえず胸を撫で下ろし、その場にへたりこむ。
相変わらずズキズキと痛む頭を押さえながらベッドに横たわる紫衣を見ると、何もなかつたとはいえさすがに下着姿の肢体は艶かしい。

「つたく… 飲み過ぎなんだよ」

化粧も落としていないその頬を人差し指で突いた瞬間、突然紫衣が目を開ける。

「勝手に触んな」

「おわつー！ 起きてたのかつー？」

*

「うー… 水、頂戴」

田をこすりながらベッドから起き上がつた紫衣が、大きく伸びを

する。

「あ、ああ…」

冷蔵庫から取り出した水のペットボトルを紫衣に渡すと、紫衣はじっと俺の顔を覗きこんで眉間に皺を寄せる。

「ねえマキ。昨日私達、セックスした?」

「セック…！」

絶句して硬直する俺は、すこぶる情けない顔をしていたに違ない。その表情だけで、紫衣は昨日の夜のことをあらかた理解したようだ。

「ふうん、じゃあいいや。シャワー浴びてからコーヒーいれといて」

そう言つと、紫衣は何事も無かつたよつてひげッドから降りてバスルームに向かつた。

茫然と紫衣の後姿を見送る俺は、鎌子が言つ。

「どの種族でも女は強い生物ぞえ。食べられなくて良かつたぞえ、牧本」

「じょ、[冗談キツイな…」

頬を引きつらせ立ち上がり、俺はコーヒーを注ぐ。トコーヒーを注ぐ。

暫くすると、体から湯気を立ち上らせた紫衣がバスルームから出てくる。

バスタオルを巻きつけた体から、艶かしい色香が漂つ。

「お、お前なあ…、その格好」

「何?」

さつぱつとした表情で聞き返すと、ソファーに深々と座つて紫衣は「コーヒーに口を付ける。

初めて出会った紫衣は、思つた以上に奔放な性格の持ち主だった。

カーテンの合間から射し込む陽の光を眺めながら、紫衣は言った。

「私が何者かなんて、実はどうでも良いことなのよ

「…どういう意味だ？」

「私が居て、目の前にマキが存在してる。いいじゃない、それだけ

で

「…？」

その言葉の意味が、この時の俺には分からなかつた。

ちかちかと照りつける光の粒子を、紫衣はその紺色の瞳でいつまでも見つめていた。

第21話 ギミック世界のワンドララー（その5）

さすがに箱をかぶつたままの紫衣を一人にする訳にはいかないの
で、家まで送ることにした。

なるべく人目に付かない路地を選んで歩こうとするのだが、人々
の好奇の視線など全く意に介さない様子で紫衣は平然と歩き続ける。

鳴り止まない蝉の声の中、照りつける陽射しがアスファルトに蜃
気楼を浮かび上がらせる。

この炎天下でダンボールをかぶつている紫衣は、相当暑いはずだ。
「箱の中、熱こもつてないか？」

「…大丈夫」

「嘘つけ。声が朦朧としてるぞ」

「い、いいのよ…うるさいなあ…それよりあんたの方が顔赤いわよ
」

「そ、そりやお前が…さつき…」

シャツの袖で汗を拭いながら困惑の俺を見て、紫衣は箱の中でく
ぐもつた笑い声をあげる。

通学路の途中にある田くてモダンな建物が、紫衣の家だった。
紫衣の部屋は通りに面した2階にあり、学校に行く俺を紫衣は毎
朝その窓から見ていた。

俺の姿を見つけると、紫衣は急いで部屋の窓を閉めて玄関から出
てくる。

俺が家の前を通り過ぎた後、すぐ紫衣は駆け寄ってきて背中を抱
で小突く。

お互ひの素つ氣無いフリと他愛ない会話から、俺と紫衣の一日は
始まる。

いつしか俺も、学校の行き帰りにそのまま窓を見上げるよつとなっていた。

「今日は家に居るよ

「分かつたわよ……でも私、箱は取らないからね」

不満げにそう言つと、紫衣はしぶしぶと玄関の鍵を開ける。

「……頑固な奴だな」

「世界を変えるには、これくらいの気概が必要なのよ

「世界？……何のことだ」

「そのうち、分かるわよ」

ひらひらと手を振りながら、紫衣は玄関のドアを閉めて家の中に入つた。

*

自分の家に帰ると、俺は玄関先に荷物を放り出しそのまま寝転んだ。

「はあ……疲れた」

神楽達に携帯で連絡しようかとも思つたが、もう学校に戻る気にもならなかつた。

まだ昼前だというのに、今日は随分と色々なことがあつた気がする。

バラバラになつたパズルのピースのよつて記憶は混乱し、ずっと違和感だけが残り続けた。

そして最後には、箱をかぶつた紫衣の登場だ。

「……どうなつてんだ？ いつたい

靴を脱ぎ散らかして玄関で大の字に寝そべつてると、家の中から聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「おかえりなさい～」「おかえりぞえ」「もつ部活終わったん？」
一階から駆け下りてきたのは、りもんと鎌子とシェリルだった。
いつもと変わらない3人の様子を見ると、なんだか無性に安堵した気分になる。

「マキさんお疲れですか～？」

深い緑色の瞳を大きく見開いて、りもんが俺の顔を覗き込む。
いつも見慣れた2本の触角が、左右に可愛らしく揺れる。

「熱は無さそうやね

その隣で俺のおでこに手をあて、怪訝そうな表情をしたシェリル
が言つ。

いつもと同じ妖精や化身達との何気ない会話がこれほど安心できるものだとは、思つてもみなかつた。

「とにかく、部屋に戻つて休むぞえ

鎌子に手を引っ張られながら、ふと思つ。

歪んでいるのはこの世界ではなく……もしかして……俺の方なのか？

さつき別れ際と言つた、紫衣の言葉を思い出す。

『世界を変えるには、これくらいの気概が必要なのよ

…世界？何のことだ？

頭の中が、ますます混沌とした沼の底に嵌り込んでこくよくな気がした。

第22話 そして、夏の終わりに

「3人とも昨日はどうしたんですか～！？朝帰りつていうか、もうお昼ですよ～！」

アパートに戻ると、冷蔵庫の中でもんが待ちくたびれた表情で頬を膨らませていた。

「いやあ…ちょっと飲みすぎちゃって…」

頭を搔く俺の隣で、シェリルが冷たい視線を投げかけたまま嫌味を言う。

「つちは劇場の前に放置されたまま、マキは誰かさんと大人の夜を過ごしたんやもんな」

「ええ～！！～どういう事ですか～！？」

「や、そういう勘違いされるようなことを…」

「こひいう場合、恐縮した男が責められるのは自明の理なのぞえ」

「う、うひ…」

一日酔いの残る頭を搔きながら、すっかり昇りきった陽光の射し込むベッドに横になる。

結局、紫衣とはホテルを出た後すぐに別れた。

何事も無かつたように片手を少し上げて微笑んだ後、紫衣は颯爽と人混みの中に消えていった。

「そついえば、まだ盆休みの真つ最中なんだな…」

天井を見つめたまま、重い溜息を吐き出す。この数日で随分と色々な事があつた気がする。

東川咲奈と映画を観に行つた後でフラれて、坊主頭にして、サイクリングして、

坂上紫衣の演劇を行つて、酔い潰れて、宿醉の頭を抱えて朝
帰り。

「俺は、いったい何をやつてゐるのだろう?」

「今日は何をするんだ?」

いつものように口に口ひげプロンを付けた鎌子が、俺の顔を覗きこむ。

「一日酔いだから寝る」

「珍しいですね?」マキさんが小説書かないなんて?」

「ああ、今日は何もしない。もう寝る寝る」

そう言って毛布に包まうとした時、鎌子が突然俺の前に携帯電話を差し出す。

「電話が来たぞえ」

「ちえ、こんな時に。いったい誰だよ?」

点滅する着信ランプを苦々しく見つめながら、ベッドの中から鎌子の差し出す携帯電話を受け取る。

だがディスプレイに表示された名前を見て、俺はベッドから飛び起きた。

着信『東川咲奈』

*

「すみません。急に呼び出しちゃって」

「どうしたんだよ? いきなり」

自転車を止め、俺はシャツの裾で少し汗ばんだ額を拭う。

駅の改札を出た所で、東川咲奈は2日前の別れ際の涙が嘘のように晴れやかな表情で立っていた。

「マキさん……ちょっと顔がむくんでませんか?」

「え、ああ…ちょっと昨日飲み過ぎて…」

故意ではないにしろ、まさか朝まで裸同然で他の女性と寝ていたなどと言えるはずも無い。

人混みを避け、俺達は駅の待合所に移る。

珍しくTシャツにジーンズというラフないでたちの東川咲奈は、傍らに大きめのバッグを抱えていた。

「え？ もしかして…もう地元に戻るのか？」

「…」

俺の質問に、東川咲奈は何も言わず視線を逸らす。

「最後の挨拶に、わざわざここまで？」

「…そう、思います？」

「ん？」

意味が分からず首を傾げていると、彼女は少し照れた表情で抱えたバッグを両手に持ち替え、言つた。

「今日は視察にきました。私がこれから住むアパートの

「…へ？」

「分かりませんか？」

「うん」

「私、地元に帰るのはやめました。しばらくマキさんの所にやつかいになります」

「…え？」

茫然とする俺を尻目に、東川咲奈は目を細めてくすりと笑う。

「『來い』って言いましたよね？マキさん」

「え…ああ、確かにそう言つたけど…え？」

「だからきました」

「…」

平たく伸びた白い入道雲がまもなく訪れる秋の気配を感じさせる
中、木陰から射し込む陽射しが頭上で光の粒を拡散させていく。
淡い水色の空の向こうに、小さな鳥が羽根を広げて旋回している
姿が見えた。

世界なんて、次に何が起こるか分からない。
踏み出せば、何がが変わる。
だから、楽しいんだろう。
なぜかふと、そんなことを思った。

第23話 スラップステイック・ラブソーティ

「荷物は徐々に持つてきます。どのくらい運べるかなあ？ 家電はどうしましちゃうね？ あとそれに…」

次々と話をする東川咲奈の表情は、これまで見たことのないくらい無邪気さに溢れていた。

自転車を押しながら駅からの道を彼女と並んで歩く。

俺のアパートが近づくにつれ、ふと一つの疑念が生まれる。

足を止め頭を捻る俺に、東川咲奈が尋ねる。

「マキさん、どうしたんですか？」

「いや、実は…」

言いよどみながらも、疑念は確信に変わりつつあった。
琥珀にも、紫衣にも、あの島田以蔵にすら見えている。なら、間違いなく…。

「実はさ、俺の家には既に同居人っていうか、同居擬人化人物が3人ほど居て…」

「え？ 意味がよく分かりません」

「ま、まあちょっとややこしい話なんだが…」

りもん達のことをどう説明しようかアパートの前で悩んでいると、突然後方からバイクのエンジン音が聞こえてくる。

振り返る俺と東川咲奈の目の前に、猛スピードの原付バイクが突っ込んできた。

「おわっ！」

慌てて東川咲奈をかばって原付バイクを避ける。

フロントブレーキをかけたバイクは目の前で見事なジャックナイフターンを決める。

緋色の袴を靡かせ、白鼻緒の草履で地面に弧を描いた土埃の向こうの装束姿は、間違いない…森琥珀だった。

「…琥珀」

茫然と立ち竦んでいると、フルフェイスのヘルメットを取った森琥珀がすかすかと大股で歩み寄ってくる。

「お、お前、巫女さんのバイト中じゃないのか？その格好はーん！？」長い髪を髪留めで束ねながら琥珀は眉をひそめる。「つてか、すつゝく嫌な予感したから来てみれば…何やつてんのかな？束」

恐るべし巫女パワー。あの狐集神社からここまで、どんなスピードでやつてきたのだろうか。

「そ…そのバイク、どうしたんだよ？」

「島田以蔵に借りてきた」

「巫女姿でバイク乗るなよ…田立つだろ」

「つてかつるさい！それより何よ、その眼鏡娘はつ…？」

琥珀はびし！と人差し指で東川咲奈を差す。

「マ、マキさん…！」の方、知り合いでですか？」

琥珀の勢いに圧倒された咲奈が、俺の背中に小さく隠れながら尋ねる。

「え…まあ。遠縁の親戚で」

頭を搔く俺の姿を見て、琥珀は更に頬を膨らませる。

「つてか何言つてんの！束は私の許婚だからねつ…」

「い、いいなずけつ…？いつからお前はつ…」

玄関の前で俺が右往左往していると、アパートの部屋からりもん

とシーリルと鎌子が顔を覗かせる。

「何やつてるんですか～？」「お、おひは痴話喧嘩やね」「牧本は

女関係で忙しいぞえ」

「うわっ～お前ら顔出すな～せや」「じへなるから～」

「つてか、この間のマリモの妖精じゃないの」

「お久しぶりです～！琥珀さん」

「マキさん～」の人達は？

「ああ～ウチらはマリモの妖精とカマキリの化身とママチャリの分身で…」

「ぶ…分身？」

「つてか束～この眼鏡つ娘は誰よ～！」

「あ、今日から居候させて頂く東川咲奈といいます」

「～～～何つ～束～どつ～つ～と～？」

「わーい、仲間が増えると嬉しいです～」

「そりいえば、みんな揃いも揃つて貧乳ぞえ」

「な、何の話ですか？」

「うわっ～お前らちよつと待てつ～～～～～～～～喋るな～」

「つてかだから！私を差し置いて何でこの娘と～？」

「これだけ女性陣が居るのに皆貧乳つてのも…」

「マキつて趣味偏りすぎやね」

「既成概念の打破かもしれないぞえ」

「なるほど～。アンチテーゼですね～」

「な、何の話ですか？」

「お、お前ら、ちょっと俺の話を…～」

「つてかこの娘が束と一緒に住むなら、私も同棲する～」

「な、何言つてんだ琥珀つ～？」

「ぺつたんこです～」

「え？ ぺつたん…？？」

「でも昨日の坂上紫衣は違つたぞえ」

「は～？ 誰よ紫衣つて！」

「あわわわっ！な、何でもない！鎌子っ！」

「口が滑つたぞえ」

「どういうことよつ！束つ！」

「だ、だから俺の話をつ…！」

結局、俺の人生は小説並みにスラップステックのかもしけない。
つづづく、そう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3153y/>

ギミック世界のワンダラー

2012年1月5日22時50分発行